

# 『旅愁』『欧洲紀行』における横光利一の 東西文明論とその破綻

福 永 勝 也

## はじめに

大正から昭和の時代にかけて「文学の神様」と呼ばれ、モダニズム文学運動の旗手として絶大な人気を誇っていた横光利一は、盟友だった川端康成が今日において猶<sup>なお</sup>、その名声を轟かせているのとは対照的に、作家としての存在感は人々の記憶の彼方に置き去られている観がある。

横光は一九二三(大正一二)年一月、刺激的な文学論「時代は放蕩する(階級文学者諸卿へ)」を「文藝春秋」創刊号に発表して、当時、隆盛を誇っていたプロレタリア文学を「時代錯誤」と舌鋒鋭く批判する。その二年後の一九二五(大正一四)年二月には「感知能力を通して主観化された客観が触発する感性的認識」という趣旨で、芸術至上の新感覚主義を華々しく打ち上げる。当時の文壇に横溢していた既成観念を打破するとの意気込みで、その新境地を切り拓<sup>ひら</sup>こうとする文学思潮には、菊池寛から「あれは偉い男だから友達になれ」と横光を紹介された川端康成も参画していた。

その横光は一九二三(大正一二)年五月、文芸誌「新小説」に『日輪』、「文藝春秋」に『蠅』を同時発表して文壇デビューを果たしている。この頃、早稲田大学の同級生だった文学仲間の妹、小島キミと同棲していたが、彼女はその二年後の六月、結核を発症して一年後に亡くなる。そして、これが常人には推し量れない横光の律儀さというべきか、彼女を葬った直後の一九二六(大正一五)年七月八日、キミとの婚姻届を役所に提出するのである。その翌月、横光は回復の見込みのない病魔と闘うキミの姿を脳裏に思い浮かべながら、その最後の日々を綴った短編『春は馬車に乗って』を

発表して、彼女への弔いとする。剛毅でありながら繊細で、情の厚い横光の人となりを表わすエピソードである。

その後、芥川龍之介の勧めもあって上海を旅行し、一九二八(昭和三年)年一月から二年余にわたって初の長編小説『上海』を連載、それが新感覚派文学を代表する作品として高く評価される。そして、一九三五(昭和一〇)年四月に「純粹小説論」を発表する。これは「もし文芸復興といふべきことがあるものなら、純文学にして通俗小説、このこと以外に、文芸復興は有り得ない」「純粹小説が現れないやうな純文学や芸術文学なら、むしろ滅んでしまふ方が良いであらう」という挑戦的なもので、「純粹小説」たり得るには私小説的な意識を極力排し、純文学にして通俗小説であること、そしてそのためには偶然性と感傷性が欠かせないと論じている。今日的感觉でいえば、純文学と通俗小説を折衷した先進的な中間小説と言えるかもしれない。

このように、横光は先鋭的な文学論を相次いで発表して、勇猛果敢に昭和文壇を衝き動かして行く。そこには、文学に対する生真面目で真摯な姿勢があったわけで、それは偏<sup>ひとえ</sup>に横光の純朴な人間性に負うところが大きかった。そのような<sup>ほとぼし</sup>迸る情熱と無私の生き様が共感を呼び、次第に昭和文壇の旗手として評価されて行く。それに加えて、横光の知的関心事は文学に止まらず、広く政治や経済、国際情勢などにも及び、そのカリスマ的知識人としての名声は言論界にも広く轟き渡るのである。

## 1. 東西文明論という大命題に取り組むため、モダニズムの旗手がヨーロッパへ

明治開国以来、日本は「近代化」の名の下、欧米諸国から最新の科学技術や軍事力、社会インフラ、法体制など富国強兵のための有りと有らゆる手段を導入して、世界を席捲していた西欧列強による植民地支配から国体を護持することに成功した。司馬遼太郎ならずとも、日本の近現代史を振り返れば、国家の行く末を案じる当時の賢人たちの叡知と英断は特筆に値

するものであろう。

これら導入した西欧型近代化路線は日本の社会や人々の日常生活の中に広く浸透し、「ハイカラ」という言葉に象徴されるように、西欧由来の外來文化はライフスタイルを中心に熱狂的ブームを喚起することになる。その結果、日本固有の伝統や精神文化は次第に存在感を失って行くわけだが、このような明治の無批判的な西欧文化受容の時代が過ぎ去り、昭和の世に入ると、風向きは変わって来る。つまり、日本が経済、軍事的に大国の仲間入りをし、人々も西欧文化を日常的に摂取して、それに馴染んで来ると、過度の西欧化に対する反発が生じ始めるのである。

その帰結として、愛国心が惹起され、必然的に日本人としてのアイデンティティの再確認を希求する動きが顕著になる。つまり、西欧文化の導入以来、初めてそれに対する検証の必要性と、「自我」の象徴ともいべき日本主義に対する再評価の機運が起こって来たのである。

その頃、文壇において「モダニズムの旗手」と崇められながらも、その内なる心魂におい強烈な国粹的精神の持ち主でもあった横光は、表面化して来たこの東西文明の相溶に甚く興味を惹かれる。そして、いつの日かヨーロッパの地を訪れ、「西洋」の正体を自身の眼で正視<sup>まなこ</sup>して、東西文明論という大命題に挑戦したいと考えるようになっていた。

当時のヨーロッパ情勢は、フランスでは左翼人民戦線と右翼ファシズムの激突、そしてそれに伴う大規模なストライキの頻発によって社会生活が混乱を極めていた。隣のドイツではヒトラー総統がナチス独裁政権を樹立して、民意を完璧に封じ込める絶対的国家統制を敷いており、他方、スペインにおいてもフランコ総統による独裁政府が樹立されようとしていた。このように第一次大戦後、しばらく小康状態を保っていたヨーロッパに不気味な暗雲が垂れ込め、一触即発の気配すら漂い始めていたのである。

国際情勢に敏感だった横光がそのことを知らないはずはなく、そのような危機的状況にある時こそ「西洋」の正体が掴めると考えていたのかもしれない。そして、その機会は突然、やって来る。

一九三五(昭和一〇)年八月から一二月にかけて、横光は大阪毎日新聞と傘下の東京日日新聞に『家族会議』を同時連載して好評を博していた。それに気を良くした新聞社が、翌年八月に開催されるベルリン・オリンピックの現地取材記者として横光に白羽の矢を立てたのである。「大阪毎日新聞社友」という肩書きでの特派で、渡航費やホテル滞在費は新聞社持ちだが、帰国後、その西欧体験に基づく長編小説を新聞連載するという条件が付いていた。

翌年一月に「全集」を刊行するほどの大家になっていた横光の洋行は、新聞社による派遣ということもあって文壇やメディアの注目の的となり、出発に先立って、新聞社や文芸雑誌主催の座談会や歓送会も数多く開催された。その内の一つ、菊池寛と一緒に文芸誌『文学界』主催の対談に臨んだ新鋭の批評家、小林秀雄は横光に次のような忠告をする。

「外国へ行って一番得てくるのは感覚のひろがりだろうね。思想的なものを得るのは本でたくさんだからね。それを生で見たり聞いたりしてくるということね」「日本の今の文化の歪み、つまり特殊性、そういうものを僕等は日本に生活していると実にわからない」「そういうものを、僕はパリへ行っただけで、思い掛けない直感を得ると思うんだ」(『文学界』昭和一年四月号)。

つまり、当地で大いに「西洋」の風に吹かれ、数々の至宝の芸術に触れ、さらに堅苦しい「日本」という鎧よろいを脱ぎ棄てて異国に遊ぶことこそが、西欧文化の正体に迫り、自身の滋養にもなるというのである。これは、短期間の西欧滞在で見聞きしたことを小説にしようといった陳腐なことは考えなさんな、さらにそのような近視眼的なことでは「西洋」という途轍とてつもない巨像の正体に迫ることは叶わないぞーという諫言だったのである。

小林は横光よりも年下だが、その慧眼けいがんたるや当世随一といっても過言ではない。この言葉が胸の奥深く響いたのか、横光は帰国後に発表した小説『旅愁』で次のように取り上げている。主人公の矢代耕一郎に「僕の友人は日本を出るとき面白いことを云いましたよ。君がパリへ行ったら何も勉

強せずに、ただ遊べと云ったが、遊ぶというのも全く骨の折れるものです  
(1)ね」と語らせているのである。

## 2. マルセイユで血まみれのキリスト像と衝撃的な邂逅、嫌悪感が募る

横光は一九三六(昭和一一)年二月二日、神戸港から日本郵船「箱根丸」でヨーロッパへ旅立つ。帰国がその年の八月だから、往復の旅程を差し引くとヨーロッパ滞在は正味五ヵ月前後ということになる。

この「箱根丸」には、俳人、高浜虚子とその末娘が乗船していた。パリ留学中の二男を訪ねる旅だったが、二人とも横光と同じ一等船客で、横光が妻に送った手紙に「僕の食卓は高浜虚子さんとお嬢さん、機関長上ノ畑純一氏と僕の四人」<sup>(2)</sup>とある。この上ノ畑氏はヨーロッパ渡航歴二十六回という同船のベテラン機関長であると同時に、「楠窓」という俳号を持つ虚子の弟子でもあった。そのようなこともあって、船内ではしばしば虚子主宰の句会が催され、横光も参加している。また、『旅愁』には年配の元作家、東野なる人物がパリで盛んに俳句を詠み、東西文明をめぐって議論を戦わせる主人公の矢代と久慈に苦言を呈する場面があるが、そのモデルが虚子だったのである。

「箱根丸」が台湾沖を航行している時、東京では「二・二六事件」が発生し、その衝撃的な事件は翌二七日、船内の「無線ニュース」(号外)で船客たちに知らされる。政治にも並々ならぬ関心を抱いていた横光はこの報に接し、日本の行く末について大いに危惧するが、『歐洲紀行』によると、その時、甲板では上流階級と思<sup>おぼ</sup>しき若い日本人乗客たちが、我関せずといった表情でデッキゴルフに興じていたという。

その後、船がシンガポールに入港した際、茹だるような熱気に辟易とした横光は、持参していた新調仕立ての夏服に着換える。それはセメントを入れていたインド産の荒い麻袋を洋服に仕立て直したものだが、横光はそれが「涼しい」とすっきりと気に入り、早速、その背広を着てステッキ片手にデッキを闊歩するのだった。しかし、それがセメント用の麻袋である

ことは、早くも当地の両替屋に見破られている。

当時のヨーロッパ行は与謝野晶子や林芙美子が利用したシベリア鉄道經由とインド洋からスエズ運河を経て地中海に至る船旅の二ルートが一般的だった。船旅の方がはるかに日数を要するが、それを選択した理由について横光は次のように述べている。「印度洋を廻れば未開の地から漸次にヨーロッパの文化の頂上へ行く」「つまり彼らの長い歴史を通して現代へ現れるようなもの<sup>(3)</sup>だ」。

西欧列強が植民地支配を進めているアジアから中東、アフリカ地域を望観しながらヨーロッパに辿り着くという行程は、現代史を目の当たりにしながら航行する文明歴史紀行のようなものである。実際、日頃から西欧列強によるアジアの植民地支配を苦々しく思っていた横光にとって、この船旅は東西文明の対立構図を再認識させる貴重な体験となった。

そして三月二六日の夕方、右手にコルシカ島、左手にサルジニア島を視認した時、横光は自身が「ヨーロッパ」の領域に入ったことを実感して緊張状態に陥っている。その時の心情は『旅愁』において、自身の分身である矢代を通して次のように吐露している。「彼(矢代：筆者注)は今の自分を考えると何となく、戦場に出て行く兵士の気持ちに似ているように思った。長い間日本がさまざまなことを学んだヨーロッパである。そして同時に日本がその感謝に絶えず自分を捧げて来たヨーロッパであった<sup>(4)</sup>」「明日はいよいよ敵陣へ乗り込むのである<sup>(5)</sup>」。

これはマルセイユ上陸前日の心境だが、横光にとってヨーロッパは畏敬の念を抱く存在であると同時に、その深根においては相容れぬ「敵」だったことを図らずも示している。

翌二七日、横光はマルセイユに上陸するが、『欧洲紀行』には「街路樹は皆揃いも揃った大木ばかりだ。家は古びて灰白色。ノートルダム<sup>(6)</sup>の頂上へ上る」とある。そして、それに続いて「私の足は硬直して片方が動かない<sup>(6)</sup>」、つまり上陸した後、この港町の岩山に築かれたノートルダム聖堂に向けて登っている時、足の筋肉が硬直して歩けなくなると記述している。

このハプニングは『旅愁』にも登場しているが、長い船旅による運動不足と、それに起因する筋力の衰えが原因と思われる。それに加えて横光の場合、西欧に対する敵愾心<sup>てきがいしん</sup>が人一倍強かったこともあって、「敵陣」に乗り込んだという極度の緊張感が一種の肉体的パニックを引き起こした可能性もある。

それほど悪感情を抱いているのなら、何故、ヨーロッパにやって来たのかということになるが、実際、『欧洲紀行』に記されたマルセイユに対する印象は芳しい<sup>かんば</sup>ものではなかった。「不思議なことに、マルセイユの群衆は誰一人笑っているものがない」<sup>(6)</sup>「午後の五時近くでいっぱい<sup>(6)</sup>の群衆がぞろぞろ街に溢れているのだが、疲れて、青ざめて、沈み込んで、むっとりしているものばかりだ。そこへ夕陽があたっている。これがヨーロッパか。——これは想像したより、はるかに地獄だ」。

これは過度の思い込みによる一種、偏見の眼差しというほかに、客観的な観察結果とは到底、言えない。まして、一歩足を踏み入れた当日に「これがヨーロッパか」「地獄だ」では、あまりにも短絡的、最初から結論ありきと指摘されても致し方が無い。

元来、港町は威勢の良い漁師やその家族たち、さらに魚介類を並べた露店に群がる観光客たちで活気に満ちているもので、とりわけ地中海でも名高い港町であるマルセイユがその例外であろうはずはない。魅力的な観光地でもある。しかし、横光の<sup>まぶた</sup>瞼にはまるで「死人」<sup>しびと</sup>が蠢く<sup>うごめ</sup>ような街と映ったのである。

このような神経過敏症的な反応は、街の高台に<sup>そび</sup>聳えるノートルダム聖堂を訪れ、そこで流血のイエス像を目の当たりにした時、最高潮に達する。その時の心境を矢代は次のように述べている。

「矢代はどきりと胸を打たれた。全身蒼白に瘦せ衰えた裸体の男が口から血を吐き出したまま足もとに横たわっていた」<sup>(7)</sup>「いきなり度肝を抜くこの仕掛けには矢代も不快にならざるをえなかった。それもよく注意して見るとその死体はキリストの彫像である。皮膚の色から形の大きさ、筋に溜

った血の垂れ流れているどろりとした色まで実物そのままの感覚で、人人を驚かさねば承知をしない、この国の文化にも矢張り一度はこんな野蛮なときもあったのかと矢代は思った」「しかも、この野蛮さが事物をここまで克明に徹せしめなければ感覚を承服することが出来なかったという人間の気持ちである。このリアリズムの心理からこの文明が生れ育って来たのにちがいない」<sup>(8)</sup>。

西洋精神世界のバックボーンとも言うべきキリスト教との衝撃的な邂逅シーンである。誰にも優しく微笑みかける慈悲の心と包容力に満ち溢れた仏像を見慣れた矢代(横光)にとって、これほどまでリアリズムに富んだ血まみれのキリスト像は本能的に嫌悪の情を掻き立てられるもので、それが昂じて「野蛮」と詰る<sup>なじ</sup>ことになる。

その一方で、時を置かずして矢代の恋人になる敬虔なクリスチャンの宇佐美千鶴子は、この時、同じ船客の一員として一緒に聖堂を見学していたが、このキリスト像に対しては厳かな<sup>おこそ</sup>気持ちになって深く首<sup>こうべ</sup>を垂れるのであった。このように、横光の東西比較文明論はこのマルセイユという上陸地において宗教的相克という形で激しく火蓋<sup>ひふた</sup>を切るのである。

ロンドンに駐在している商社員の兄を訪ねる途中の千鶴子は、停泊時間を利用してマルセイユで一時下船し、矢代たち日本人乗客たちと一緒に市内見学をした後、帰船している。一方、当地からパリに向かう予定だった矢代は思いがけない足の痙攣<sup>けいれん</sup>で再び船に戻り、一等サロンでしばし休憩する。そこへ千鶴子が顔を見せて、二人は親しく会話を交わすことになるのだが、その内容は矢代がマルセイユの印象を千鶴子に尋ねるところから始まる。

「千鶴子は云い難そうに一寸考える風であったが、唇にかすかに皮肉な影を泛べると、『西洋人が綺麗に見えて困りましたわ』と低く答えた。『男が?』「ええ。」「『ははははは。』と矢代は思わず笑った」<sup>(9)</sup>。そして、矢代も思わず「僕もそうですよ。こちらの婦人が美しく見えて困りましたね」<sup>(10)</sup>と言いかけて、その言葉を飲み込む。



それには、次のような伏線があった。「日本人としては千鶴子は先ず誰が見ても一流の美しい婦人と云うべきであった。けれども、それが一度ヨーロッパへ現れると取り包む周囲の景色のために、うつりの悪い儂ない色として、あるか無きかのごとく憐れに淋しく見えたのを思うにつけ、自分の姿もそれより以上に蕭条と曇って憐れに見えたのにちがひあるまい<sup>(11)</sup>」。

この赤裸々な独白は、西欧に対して敵愾心を抱いていた矢代(横光)が、図らずもその裏返しとして劣等意識を持っていたことの証左でもある。そして、矢代は続ける。「夫婦でヨーロッパへ来ると、主人が自分の細君が嫌いになり、細君が良人を嫌になるとよく云いますが、僕なんか結婚してなくて良かったと思いますね<sup>(10)</sup>」。人一倍、日本人としての自我と誇りを強く持っているはずの矢代にとって、これは想像を絶する「卑下」というほかない。そして、このような人種に関わる差別的言辭を聞かされた千鶴子は、最初は笑顔で応じていたものの、次第にうな垂れて黙り込んでしまう。

そのようなコンプレックスを密かに抱える矢代だが、表向きは胎<sup>ほら</sup>からの日本主義者を自認し、殊の外、「純血」を掛け替えないものと信じて疑わない。それ故にというべきか、戯<sup>たわむ</sup>れであるにせよ、白人女性と性的交わりを持つことは自身が穢<sup>けが</sup>されることと考え、禁欲を固く誓って次のように呟<sup>つぶや</sup>くのである。

「ああ、今のうちに、身の安全な今のうちに日本の婦人と結婚してしまいたい<sup>(11)</sup>」「何も千鶴子を愛しているのではない。日本がいとおしくてならぬだけなのである<sup>(11)</sup>」。そして「これから行くさきぎきの異国で、女人という無数の敵を前にしては、結婚の相手とすべき日本の婦人は今はただ千鶴子一人より矢代にはなかった<sup>(11)</sup>」「血液の純潔を願う矢代にしては、異国の婦人に貞操を奪われる痛ましさに比べて、まだしも千鶴子を選ぶ自分の正当さを認めたかった<sup>(12)</sup>」という結論に辿り着くのである。

ここには、白人の血を拒否する強烈な民族主義の姿が垣間見える。実際、<sup>たくいまれ</sup>類稀なる愛妻家で知られた横光は、芸術の都であると同時に歓楽の都でも

あったパリにおいて、白人娼婦の肉体に群がる多くの日本人旅行者たちとは一線を画し、終始、清浄なる日々を送っている。

### 3. パリに対する拒否反応と、フランスの唯物論 VS. 日本の唯心論という二元論

翌三月二八日、横光は列車でマルセイユを發ち、パリに向かう。その出發直後、あれほど忌み嫌ったフランスだったのに、車窓いっぱい広がる印象派絵画かと思紛うような色鮮やかな田園風景にすっかり魅了される。「汽車の進行にしたがって繰り拡がって来る田園。私は冷やかに眺めることばかりに努力した。けれども、どうにも美しい。桃杏一時に開く春の木々の芽の柔かさ。連り下るなだらかな牧場。点在する風雅な農家。杏の花に包まれたローズのゆるやかな流れ…」。

この『欧洲紀行』の記述を見る限り、当初のフランスに対する嫌悪感は大いに修正された観が濃厚である。しかし、何事にも一家言なくては気が済まない性分のせいかな、「私はこういう恍惚とした風景を見ながら、ふと気がつくと、なお植民地の勃興を考えている」<sup>(13)</sup>のである。つまり、その風景が夢のように平和的で素晴らしければ素晴らしいほど、西欧列強による植民地支配と無慈悲な搾取の現実が脳裏に浮かび上がって来て、その風景に安易に酔い痴れてはいけなさと自らを戒めるのである。

横光が乗った列車はその日の夕方六時、終点のパリに到着する。ところが、如何なる事情が出来たのか、一週間後の四月四日に至るまで『欧洲紀行』には記述がまったく無い。四日の記述にしても、「雨。巴里へ着いてから今日で一週間も立つ。見るべき所は皆見てしまった。しかし、私はここの事は書く気が起らぬ。早く帰ろうと思う。こんな所は人間の住む所じゃない。中には長くいることを競争するものもいるが、愚かなことだ」<sup>(14)</sup>と不愛想かつ不機嫌極まりない言葉の羅列である。それに加えて、「私は自分で来たくて巴里へ来たのでは決してない。私の友人たちが、行け行け、行け行けと、とうとう押し出してしまったのだ」<sup>(15)</sup>と横光らしくもない見苦

しい言い訳をしている。

マルセイユ上陸時の嫌悪感が、パリで再び息を吹き返したのである。このような辛辣な態度は、この街の魅力に酔い痴れた永井荷風が『ふらんす物語』において滔々<sup>とうとう</sup>と謳<sup>うた</sup>い上げた「巴里讚歌」<sup>パリ</sup>とはまさに対極を成すもので、実際、これほど凄まじ拒否反応を示した小説家は、後にも先にも横光以外にいなかったのではないか。

では、パリ到着までもない段階で、何故、これほどまで嫌悪を示すことになったのだろうか。その引き金となるような出来事は、少なくとも残された史料には見当たらない。そうだとすれば、やはりマルセイユ上陸の際に見せた横光の異常とも思える西欧敵視や敵愾心のマグマが、煌びやかなパリの街において急膨張し、暴発に至ったのではなかったか。つまり、マルセイユはフランスの一地方都市に過ぎないが、それとは比較にならない世界屈指の「花の都」となれば、それに対する反発が一層、強靱なものになった可能性がある。当然のことながら、その「西洋」が魅力的であればあるほど、自身の内なる劣等意識や心の屈折もより先鋭化したとも考えられるのである。

これは想像でしかないが、横光は東西文明を同じ基盤で優劣なく論じたかったのに、パリにやって来ると其処<sup>そこ</sup>は爛熟した文明が咲き誇り、芸術文化も百花繚乱<sup>ひやつかりようらん</sup>の状態にあることをまざまざと見せつけられた。つまり、早々に「前提」が覆されたことを思い知らされたわけで、そのことに対する口惜<sup>いきど</sup>しさと憤りが抑えきれなかったという構図である。結局は、明治ニッポンが崇めた「先進西洋」が今日において猶<sup>なほ</sup>、日本を引き離して栄華を誇っている現実を思い知らされたのである。それは、横光の「書く気が起ころぬ」「早く帰ろう」という心情の吐露と符合していると言えなくもない。

第一次大戦後、世界を急襲した大恐慌(一九二九年)は国家経済に止まらず、人々の生活をも根こそぎ破壊して、資本主義が内包する危険性を余すところなく露呈する結果となった。その最大の犠牲者は社会の底辺で喘ぐ

貧困者層だったわけで、ヨーロッパを訪れた横光はパリが資本主義という怪物の虜とりこになっていることを痛感する。「何事も打算という理由なくしては風景さえも造らないパリー人」<sup>(16)</sup>「人間の資本は金だということ——この簡単なことが、この巴里へ来て初めて分る」<sup>(17)</sup>。つまり、西欧世界は日本の義理人情や風雅といった人間味溢れる興趣とは無縁の冷徹な資本主義的経済原理によって支配されており、それが合理主義という普遍的価値体系を形成していると考える。

「文化の頂上というものは至極透明なものだ。洞察などという厄介なもの、不用で経済の割に合わぬ。ここでは何もかも向うが透いて見える」<sup>(17)</sup>「パリーではアメリカ人であろうと、黒人であろうと、イギリス人であろうと同じことだ。ここでは人間など通用しない。通用するのは金だけだ」<sup>(18)</sup>、そして「日本では、金と心を別けなければ承知しない。つまり、フランスが金で心を買うのに反し日本は心で金を買う」<sup>(18)</sup>という結論に達している。この観察について、栗坪良樹は「〈金〉と〈心〉の対立に、フランスと日本を置き換えて、認識者は唯物論と唯心論の対立という構図の内に住みつこうとしている」<sup>(19)</sup>と分析するが、確かに『旅愁』における横光の東西文明論はこの指摘の通り、ややもすると単純二元論に矮小化された観が無きにしても非ずなのである。

#### 4. 巴里の憂鬱—「パリには知識と性があるだけでリリズムがない」

パリが世界屈指の「芸術文化の都」で、そこを訪れた多くの人々はその典雅な佇まいたたずに感嘆の溜息を漏らし、街中に漂う洗練されたエキゾティシズムや彩り鮮やかな抒情に酔い痴れる。この街はいわば魅力溢れる妖精ニンフのような存在で、その評判と名声を否定する人はいないに違いない。ところが、横光はそれを真っ向から否定するのである。

「巴里にはリリズムというものが、どこにもない。何とかかとか、旅人を喜ばす工夫に熱中して、うっとりする物ばかりふん段に並べ立ててはくれるのだが、そんな物にはびっくりも出来ず、向うの下心ばかりがいや

に眼につく。雲形定木の面白さも何となく物足りぬ<sup>(20)</sup>。「フランス庭園の樹木の植込みを見れば分る。規矩整然としていて首を動かすにも角度が要るのだ。自然を變形することこの町人ほど巧みなものはあるまい。カソリックの精神というのも恐らくこのような第二の自然を云うのであろう<sup>(20)</sup>」。

ここに登場する「リリズム」は抒情的な趣<sup>おもむき</sup>、あるいは抒情性や抒情主義を意味するが、先に述べたように、この街にはまさにそのような魅力が横溢しており、それが「花の都」と呼ばれる所以でもある。ところが、横光はそれが「どこにも無い」と言うのである。これは一体、如何なることなのか。東西文明論をテーマにした小説の構想で頭が一杯だったため、其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>彼<sup>こ</sup>処<sup>こ</sup>に漂っている甘美なリリズムに気づくことなく、それに陶醉することも儘<sup>まま</sup>ならなかったと言うのであろうか。

このような、パリに対する素っ気ない第一印象は『旅愁』においても然りである。西欧文明に心酔している久慈が「『いいね。パリは。』とうっとりした顔<sup>(21)</sup>」だったのに対し、横光の分身である日本至上主義の矢代は「眼の醒めるばかりの彫刻や絵や建物を見て歩いても、人の騒ぐほどの美しさに見えず憂鬱に沈み込んだ<sup>(22)</sup>」とある。

矢代(横光)の心の深奥を探るうえで、この記述は示唆に富んでいると言えるかもしれない。何故なら、本能的に、そして単純に「パリが嫌い」というのであれば、思考回路を全面遮断すれば済むはずなのに、矢代は「美しく見えず憂鬱に沈む」のである。そこには嫌悪というより、パリそのものを自身の内なる悩みとして取り込み、それを吟味<sup>そしやく</sup>、咀嚼しながら憂えるという複雑な心理作業の工程がある。まさか、ボードレールの『パリの憂鬱』を地で行った訳でもないのだろうが、それを意識していた片鱗<sup>うかが</sup>は窺える。

「巴里の憂鬱という言葉がある。私もこの年まで、度々憂鬱は経験したが、こんな憂鬱な思いに迫られたことは、まだなかった。身が粉な粉なに砕けたように思われ、ふと取りすがったものを見ると、いずれも壊れた碎片だ。殊に雨にでも降り籠められれば、建物の黒さが身の除けようもなく

心に滲み渡って来る。立ち騒ぐ人もなく雨の中で悠々と傘もささずに立話をしている人々の風景は、のどかどころではない。いら立たしい感情はどこへかき消え、うんとも声の出ない憂鬱さが腰かけている椅子の下から這い上って来る。何ともかとも身の持ち扱いに困るのだ<sup>(23)</sup>。そして、「ここには、豊かな知識と性とがあるだけだ。感情のある真似をしたくてならぬ悩み——これがパリーの憂鬱の原因である<sup>(24)</sup>」と述べている。

ここで表現しているのは、パリーの何処<sup>どこ</sup>でも見かけるごく普通の風景なのだが、それを目の当たりにして横光は語るべき言葉を失い、ひたすら<sup>たたず</sup>佇まざるを得なかった。このような心情はマルセイユ上陸時のそれと酷似しているが、それは高村光太郎の詩「雨にうたるカテドラル」の情景を想起させる。つまり、遠く東の果ての島国からやって来た人々は、煌<sup>きら</sup>びやかに光り輝くパリ(西洋)の美しさに完膚無きまで打ちのめされ、その反動として自身の内部から湧き上がって来る寂寥感と劣等感に苛<sup>さいな</sup>まれるのである。横光の場合も、それが「憂鬱」に繋がったと考えられないだろうか。

しかし、このような横光の憂鬱は時間の経過とともに薄まって、次第に冷静な目でパリを観察するようになる。それは次のような記述からも明らかである。「私の一番困ったことは建物が高くて空が見えず、頭から押しつけて来る石の壁が、どこへ行っても打ちつづいている事である。山野の荒涼とした風景よりも、垂直になった石壁の肅条たる様の方が、人間に鬼畜の心を養うものだ。物を眺めるささやかな愛情よりも、一にも二にも行動する心ばかりが先き立って来るのである<sup>(25)</sup>」「悪にも行動、善にも行動、これが石壁の中の心理なら日本の低徊観望は、草木風月の中の心理であろう<sup>(25)</sup>」。繊細な感覚の持ち主である横光ならではの洞察力に富んだ鋭利な観察である。

## 5. 「パリ素描1」—リュクサンブール公園とモンパルナス墓地

当初、「見るべきものはすべて見てしまった」「早く日本へ帰りたい」と愚痴<sup>こぼ</sup>を零<sup>いた</sup>していた横光だが、実はパリで甚<sup>いた</sup>く心惹かれていたところがあっ

た。その一つが、荷風や光太郎、与謝野晶子夫妻、さらに藤村たちが「まるで芸術作品」と絶賛していたリュクサンブール公園である。

『旅愁』においても矢代と千鶴子がこの公園で暫し語り合うシーンが登場するが、荷風たち先人も、都会の喧騒を離れて寛ぐことが出来るこの公園を“緑のオアシス”として殊の外、気に入っていた。街中では何かと神経を擦り減らす東洋からの異邦人にとって、ここは一息つける絶好の癒しの場だったのである。与謝野晶子に至っては、現地人に倣ってここにキャンバスを持ち込み、油絵の風景画を描いて西欧風のバカンス気分を味わっている。

「文学者の彫像の多いのはルクサンブールの公園である。ここにはベルレーヌの他に、スタンダール、フローベル、ジョルジ・サンドがいる。しかし、私の好きだったのは、公園を出て、ソルボンヌの前にあるモンテーニュの像だ。これは去年の三百年祭に出来たものだからまだ新しいが、この像を見て初めてモンテーニュの精神に触れた思いがした<sup>(26)</sup>」。

このような印象を胸に抱きながらこの公園界隈を散策していた横光は、文学的興趣を掻き立てる思わぬ「発見」に遭遇する。かつて心酔していたスウェーデンの作家、ストリンドベリが一時、住んでいたホテルに出くわしたのである。「中へ這入ってどの部屋にストリンドベルヒがいたのかと訊ねると、三階へつれて行き、ここだと云う。細長い八畳で窓から隣家の屋根ばかりが見える。ルクサンブール公園のすぐ傍なので、『地獄』に出て来る公園もこの公園であろう<sup>(27)</sup>」。

そして、「私は一時ストリンドベルヒに心酔したころもあり、殊に地獄は私の心の糧だったから、この部屋を借りようかと思ったが、千五百フランもする。それに年代から考えると彼の狂人になりかけた部屋だ。空気も息詰るようだし、細長いのが第一嫌いだったので思いとまることにした。夜の公園のベンチで誰だか俺のベンチに電気をかけて、殺そうと思っているなど書いていたのを思い出すと、この部屋なら狂人になりかねないと思った<sup>(27)</sup>」と憧れていた作家の創作現場を見つけたことに嬉々としている様

子が窺える。

このようにパリという街は、世界中にその名を轟かせた偉人たちの足跡が至るところにプレートで表示されている歴史の宝庫でもある。横光がそれら著名な芸術家たちの生なる痕跡を求めて市内を逍遥したことは想像に難くないが、結局、このホテルは高家賃がネックとなって諦め、その代わりにモンパルナスのセレクト・ラスパイユ・ホテルに引っ越している。

「六階が私の部屋だ。広い墓場が眼下に見える。ボードレールもこの墓場(28)にいる」。この墓場とは、多くの著名人が永久とわの眠りに着いているモンパルナス墓地のことである。

当然のことながら、横光はこの墓地を何度か散策している。五月一日の午後、樋口某と一緒にモーパッサンの墓を訪れた時の感想である。「花の落ちた薔薇が墓石に延び上っている他に、光沢のない名の知れぬ汚い花が咲いている。死ねばこうかと思う以外に急に作家の苦しさが身に滲んで、急いでその傍から遠ざかった(29)」。感傷に浸ることすらまなぬ横光のナイーブな心情を察した樋口は、モーパッサンの墓にあった花を手折りして、記念にと横光のポケットに押し込んでいる。

その後、ボードレールの墓に詣でているが、そこでも横光は「ボードレールの石像は、よく出来ているので有名だが、私はこのポーズが嫌いである。顎を支えて前方を睨んでいる恰好は散文家ならしない。陰鬱な樹の下影に寝像もある。しかし、私には裏の石壁に滲んでいる鉄錆の方が、はるかに彼の詩を読む思いがした(30)」と、フランス人特有の奇抜な意匠を凝らしたその墓たたずの佇まいに異を唱えている。

その翌年のことになるが、横光と親交の厚かった作家の今日出海がパリを訪れ、このホテルの同じ部屋に長逗留している。横光の推薦があったと思われるが、その際、こん今が部屋係の女性に横光のことを尋ねると、彼女は横光のことをよく覚えていた。そして、「いつもベッドの上であぐら胡坐をかいておられた」「物静かで礼儀正しく、チップをはずんでくれる気前の良い人でした」と懐かしげに語ったという。



矢代と千鶴子にとっても、リュクサンブール公園脇のマロニエの並木道は恰好の散策ルートだった。そこは藤村がよく散歩していたところで、その界隈にある瀟洒なカフェ「リラ」や「ドーム」も荷風や藤村たちのお気に入り<sup>しやうしや</sup>で、横光も常連客となった。

そして、横光はある日、カフェ「ドーム」で画家、藤田嗣治のモデルをしていた元愛人のキキと会話を交わす機会があった。『欧洲紀行』によると、「(彼女は：筆者注)怖ろしい顔の人だ。しかし着ている上衣のがらは日本の能衣裳のようなもので美しい<sup>(31)</sup>」、そして「その婦人の服のがらをほめると、この布を売ってる店は巴里のサンゼルマンにある古代布屋ただ一軒よりない<sup>(31)</sup>といって私にその店の番地を教えてくれた<sup>(31)</sup>」「このおばあさんは毎日ドームへ来て話しこんでいるが、もう男にはあきあきしたという顔である。しかし、日本人を見ると懐しそうだ」とある。この時、藤田自身は日本に一時帰国中だった。

横光は、パリ長期滞在を鼻にかけて偉そうにする“パリ被れ<sup>かぶ</sup>”の輩<sup>やから</sup>を心底、軽蔑していた。彼らは単にパリに長く居て、多少のフランス語を喋るというだけで、西欧の地において社会的評価を受けている訳ではない。それと比べると、藤田はこの芸術の都で画家として大輪の花を咲かせており、横光が彼を高く評価していたことは、『旅愁』の中の「藤田嗣治はパリへ来てみると初めて豪い<sup>えら</sup>もんだと思いますね<sup>(32)</sup>」という一節からも明らかである。

パリという街は、世界中から集まった若き芸術家たちが互いに切磋琢磨する場であると同時に、その抜きん出た開放性ゆえ、男と女が快樂の限りを尽くすことが出来る別天地でもあった。藤田もその一人だった。しかし、横光<sup>ひとえ</sup>は偏に日本的倫理観の忠実な遵法者であったため、そのような男女間の解放的な交歓は自墮落と考へ、終始一貫して否定的な姿勢を崩さなかった。

「(パリという街は：筆者注)婦人が美貌を誇って出て行く度に、それが何の価値にもならぬことを悟って帰国するところ<sup>(33)</sup>」「このような所では、男

が完全に女を軽蔑し、女が全く男を馬鹿にし尽した結果が、恋愛になっていく。これは最も新しい近代恋愛の形相であろう<sup>(33)</sup>。このように、当地における爛熟した男女関係を独特のシニカルな構図で描いて見せる横光だが、その上で「芝居は人生よりも、はるかに高尚なものだという言葉は、真実である<sup>(33)</sup>」と意味深長な表現で締め括<sup>くく</sup>っている。つまり、<sup>そこ</sup>其処における恋愛関係を一種の芝居と認識し、それ故、高尚であると評価しているのである。

このような記述からも明らかのように、パリ到着直後の有無を言わせぬ拒否反応は影を潜め、次第に横光本来の含蓄のある客観的な批評が散見できるようになる。「(パリは：筆者注)建物も彫像も大理石に似た石灰岩であるから、風雨を受ける突出した部分は白く雪を戴いたように美しい。つまり、街のうす黒く煤けているのは、反対に白い部分を明瞭に浮き立たさせるバックの役をしているのだ。そこへ例のマロニエであるがこれは花より葉の方が美しい。この葉の群生の仕方は重厚な建物の線といかにもよく調和している<sup>(34)</sup>」「どの街も美しさは均衡している。どこもかしこもつまりはるかに立派にした銀座ばかりのようなものだ。ふと上を仰ぐと建物の線や彫像の微妙な精緻さ。ふと下を向くと、装飾窓の中の絶妙極まる数々の品物。通りかかる人の美しさ<sup>(35)</sup>」。ここに至って初めて胸襟が開かれ、「美しい」「調和している」といった讃辞が登場するのである。

パリはその後、まもなく左翼人民戦線と右翼の激しい政治闘争とゼネストによって、カフェやレストランが一斉に閉店するという異常事態に陥る。そのような時、横光はリュクサンブール公園のベンチに腰掛けて、この国に行く末や遙か彼方の祖国に想いを巡らすのだった。

「ルクサンブールの公園の中へ這入り、冷たい鉄の椅子に腰かけ、暮れかかっていく空を見上げながら、東京のあれこれを考えていると、不意に婆さんが肩を叩いて、腰かけ料をくれと云う。眼の前でフロオベルの石像が空とぼけた顔をして、明日の天気を見つづけている<sup>(36)</sup>」。当時の緊迫した社会情勢と老婆のシニカルなフランス人気質、そして我関せずの表情でのんびりと空を見上げる『ボヴァリー夫人』の作家、フロバールの像—まさ

に横光ならではのウィットに富んだ見事な組み合わせである。

その横光は、リュクサンブール公園の外郭に沿って延びるオーグスト・コント通りを、その人気の無さと飾り気ひとけの無い風情ゆえに、殊の外、気に入っていた。「人は殆ど通らないが、夜のこの通りの美しさは、神気寒儉たるものがある。一丈余りの高い鉄柵に沿って、黒々としたマロニエの太い幹が立ち並び、鬱蒼とした樹木の下をこつこつと稀に歩く人影が黙りこくっている。古い瓦斯燈が青く輝き、片側の建物は尽く窓を閉ざしている中を自分も黙々として歩く寂寥は物凄く身慄いのするほど美しい。ふと御影石の滑かな石垣に手を触れると、甘酸っぱい花卉の腐りかけたのが指先(37)きに喰っついて来る。人は死ぬ前には恐らくこの通りの寂寞たる光景と似ていることだろう」。

ここで使われている「神気寒儉」「寂寞たる光景」といった言葉こそ、まさに横光文学世界の真髓に迫るもので、それ故、横光はリュクサンブール公園より、この静謐せいひつを湛えた裏通りの方に心惹かれていたのではなかったか。

## 6. 「パリ素描2」—シャンゼリゼ大通りとコンコルド広場

その一方で、横光はパリ随一のメインストリートであるシャンゼリゼ大通りも気に入っていた。しばしば沿道のカフェテラスに陣取って、通り過ぎるパリジェンヌたちのファッションに目を細めていたのである。

ブローニュの森にあるロンシャン競馬場でレースを楽しんだ日のことである。「帰途、シャンゼリゼのロンパンで休む。一面に穂を揃えたマロニエの真白な花の間で、霧を噴き靡かせている噴水。エトワールから下る散歩道は、日曜のこととて、流行の春着の流れ下って来る河だ(38)」。すぐ傍きつそうを颯爽と通り過ぎる女性たちの彩り鮮やかなファッションを楽しんでいるのである。そして、「パリーの中で最も俗っぽく、しかも何人が見ても一番高雅な所はロンパン・ゼ・サンゼリゼであろうと思う。文化の最高に位置するものは何となく俗っぽくなければ価値を失うものだ。私は好みを

殺してここを最高と認める」と、このカフェを俗っぽいが高雅であると絶賛している。マルセイユ上陸直後、そしてパリ到着直後も横光の心を甚く搔き乱した嫌悪の情は、この段において遙か忘却の彼方となったのである。

とは否、何事に対しても全面的に賛意を示さないところが、また横光たる所以でもある。「私は日々外国人ばかり押しひしいでいる中に浸って、ぼんやり周囲の顔を見ているが、恐れる何物も感じたことはない。真似出来ぬものを除いては、真似する必要あるものが日本になくなって来ているのだ<sup>(40)</sup>」。つまり、この街の素晴らしさを認めながらも、その一方で「西洋、何するものぞ」といった気概を隠さない。

それは、東西間の肌の色の違いに起因する人種問題に対しても然りである。「うす黄ろい皮膚の色の美しさは、白色の中に混っていると、渋い銀のように見えることもたまにはある。低い体軀もそれに物云う他の高い上背をかがませて、ねばり強く根を張った松に見える<sup>(40)</sup>」。つまり、日本人の肌の黄色を「渋い銀色」、そして背の低さについては「根を張った松」と形容するのである。その豪胆かつ意気軒昂な姿勢は、まさに日本主義者・横光利一の面目躍如たるもので、ロンドン留学中、エディプス・コンプレックスに苛まれ、ノイローゼ状態に陥った漱石がこの言葉を知れば、どれほど力づけられたことだろう。

シャンゼリゼ大通りに加えて、横光が密かに興味を示していたのがサントノール通りである。パレ・ロワイヤルにほど近い裏通りのような街路だが、ここは知る人ぞ知る、パリ随一のファッション通りである。そのことを知っていたと見え、横光は「人通りは少く、美しさは平凡で古く、何の目立ったものもないにも拘らず、ショウウインドウに出ている品物は、手袋一つにしてからが純芸術品ばかり<sup>(41)</sup>」、そして「恐らく世界最高の通りであろう。パリー全市でこの細長いさびれた通りばかりが、パリーを私に最もよく物語る<sup>(41)</sup>」と書いている。

生粋<sup>きつすい</sup>の日本主義者で体育会系、そして剛毅<sup>こうき</sup>な性格で知られる横光が、何故、このようなファッション通りに心惹かれたのだろう。摩訶不思議とし

か言いようがないが、彼が人後に落ちない愛妻家であることは一つのヒントになるかもしれない。つまり、愛してやまない若くて美しい夫人のために、パリ土産として素晴らしいドレスでも探していたのかもしれない。

そのようなパリの街並みの中で、西洋建築美の粋を集めた芸術的建造物と横光が最高級の讃辞を呈しているのがコンコルド広場である。「坦々として光り輝いた広場に群った彫像から噴き上る幾多の噴水の壮麗さ。これを東洋のどこかにその比を捜すなら奉天の北陵か日本でなら京都の東本願寺の屋根である。深夜に森林の中を一人歩く凄さより、コンコルドの広々とした人工の極みの中を歩く物凄さは、はるかに人々を興奮させることだろう。私はここに来て真の感傷というものを感じた。自然というものは要するに自然なだけだ<sup>(42)</sup>」。

彼が深く信奉する日本主義において、「自然」はその重要な要素として位置づけられているが、それがここでは一転、自然は所詮、自然に過ぎないと切って捨てているのである。それほど、コンコルド広場の壮麗で煌びやかな人工的景観が素晴らしいと絶賛しているわけで、その威容の前で横光は身震いするほどの感動を味わっている。その衝撃は凄まじかったと見え、『旅愁』では次のような類を見ない秀麗な文章となっている。

「数町に渡った正方形の広場は、鏡の間のように光り輝き森閑として一人通らなかつた。その周囲を取り包んだ数千の瓦斯灯は、声を潜めた無数の眼光から成り立った平面のように寒寒とした森厳さを湛えている。その八方にある女神の巨像はそれぞれおのれの文化の荘重さに、今は満ち足りて静かに下を見降ろし、風雨に年老いた有様を月と星とにゆだね、おもむろな姿をとって動かなかつた。女神に添えて噴水がまた八方から昇っていた。それはこの広場を鏤ばめた宝玉となり植物となつて、夜のパリの絢爛たる技術を象徴してあまりあつた<sup>(43)</sup>」。

荷風の『ふらんす物語』における名文も色褪せて見えるほど格調の高い情景描写である。そして、ここでは西欧派の久慈に「何んて凄い景色だろう」「これから見れば、東京のあの醜態は何事だ。僕はもう舌を噛みたく

なるばかりだ<sup>(43)</sup>」と深い溜め息をつかせている。当初、「パリにはリリズムが無い」と辛口の評を下していた横光だが、この朗々たる情景描写には溢れんばかりの濃密なリリズムが漂っている。

日本優位を広言して憚らなかつた矢代も、さすがにこの広場の華麗さには度肝を抜かれたと見え、「東にチュイレリーの宮殿を置き、西はサンゼリゼの大公園に接し、北にはマデレエヌの大寺院、南に河を対してナポレオンの墓場を置いたこのコンコルドの広場の美しさには、流石云うべき言葉も出なかつた<sup>(44)</sup>」のである。つまり、この広場には矢代も頭が上がりず、異例なことに久慈と同調している。それに呼応するかのように、久慈は「ここが、世界の文化の中心の、そのまた中心なんだからなア<sup>(44)</sup>」、そして感極まったのか「もう、僕は日本へは帰らん<sup>(44)</sup>」と言い放つのである。

## 7. パリ市民は日曜日に男女で森に行つて「野蛮」になる

横光がパリに滞在していた時、左翼人民戦線と右翼保守勢力が激しく政治闘争を繰り広げ、五月の議会選挙では社会党や急進社会党、共産党など左翼陣営が圧勝してレオン・ブルム人民戦線内閣が成立する。それでは、このような左翼政権の誕生を、かつてプロレタリア文学を激しく批判し、自身、保守派を任じる横光は一体、どのような眼差しで眺めていたのだろうか。それについては、『旅愁』における久慈と八代の次のような遣り取りの中に表わされている。

「ここでの先ず何よりの自分の勉強は、この完璧な伝統の美を持つ都会に働きかける左翼の思想が、どれほど日本と違う作用と結果を齎すものか<sup>(45)</sup>」。これは社会学の勉強を目的としてパリにやって来た西欧派、久慈が、フランス政治を衝き動かした左翼思想の行方に並々ならぬ関心を示した言葉である。ここでは、その政治思潮が日本にも及ぶのか否かという点に重点を置いている。

他方、日本主義を信奉する矢代の分析は実に個性的である。「サンゼリゼの伝統派と左翼との格闘のさまなど、カソリックと科学との闘争だとい

えば云うことの出来る精神の違いの流血沙汰<sup>(46)</sup>だった」。つまり、久慈のような現実的な政治認識ではなく、この政治現象をカトリックと科学の闘争と捉えているのである。確かに、カトリックは保守勢力であり、それとマルキシズムに立脚した社会主義や共産主義との闘争と考えるのは至極、当然であるが、そこに対抗軸として「科学」を持ち出して来るのは如何なものか。横光の東西文明論には、不思議とこの科学が合理主義の同義語として屢<sup>しばしば</sup>、登場するが、この政変をカトリックと科学の闘争と位置づけることには、やはり違和感を禁じ得ない。

そのような政治の嵐が吹き荒れるパリを後にして、横光は五月四日にロンドンに飛ぶ。英国ペンクラブの会合に高浜虚子とともに招かれていたため、横光はその際に着用する紋付袴<sup>もんつきはかま</sup>を持参するほどの気合の入れようである。会合終了後、虚子はさっさとパリへ舞い戻ったのに対し、横光は暫し<sup>しば</sup>ロンドンに留まっている。そして、この都市の印象を次のように綴っている。

「ロンドン市中の建物は、大阪の堂島に似ている。石柱が太く重い。テムスの景観も丁度中之島だ。実質一点張り、装飾は堂々たる威嚇となり、大国の鷹揚さの裏影から、どことなく気ぜわしい煙りが立ち昇って感ぜられる<sup>(47)</sup>」。あまり気の乗らない感想だが、横光にとってロンドンは一息つける居心地の良い街だったのである。

その論理はこうだ。パリは煌びやかで人々を惹きつけて離さない魅惑の街であるが、その魅力が強ければ強いほど異邦人<sup>エトランゼ</sup>、とりわけ人種の異なる東洋人にとって敷居は高く、日々、緊張感を強いられる。それに対して、ロンドンは世界に名だたる産業都市ではあるが、小説家である横光にとってそれは関心外のことで、ほとんど意味を成さなかった。つまり、この街は芸術文化に関しては実に凡庸な存在で、パリで日々、体験しているような強烈な刺激や驚異とは無縁であるが故に、神経を煩わせるようなことはなかったのである。

パリからやって来た横光にとって、ロンドンは文化的には何の変哲もない平凡な都市だったため、緊張したり、臆したり、肩肘を張るようなこと

もなく、常に平常心で寛ぐことが出来たのである。それは「好き」という感情とは程遠いもので、実際、横光はこの街に対して「どこ一つ見る気も起らない<sup>(48)</sup>」という捨て台詞<sup>ぜりふ</sup>を残して、五日後の五月九日に空路、パリに戻っている。

ロンドンから戻って来た横光は、「初めて家へ帰ったような気持ちになる。私のロンドン行は、パリーを見直すために行ったようなものだ<sup>(48)</sup>」と新鮮な目でパリを見詰めて再評価するのだった。やはり、この街の芸術文化が持つ魔力は、一旦、人を魅了すると決して離さないのかもしれない。いずれにせよ、横光にとってパリはこの段に於いて「マイホーム」になったのである。

以後、横光は活発に動き回る。五月一日には色彩の魔術師と謳われるマチスの展覧会に出向き、「先日ピカソの会を見たときにはいかにしてマチスはピカソの豪宕な変化に太刀打するかがひそかに私の興味であったが、やはりマチスも大天才だと感歎した」「この二人の競い合った結果は、セザンヌを第三位に落し始めて来つつあるようだ」「美しさではマチスは第一等であろう<sup>(38)</sup>」と、まるで美術評論家でもあるかのような蘊蓄<sup>うんちく</sup>を披露している。余程<sup>よほど</sup>マチスが気に入っていたと見え、その翌日にも同展覧会場を訪れて作品を鑑賞している。

これら絵画鑑賞に加えて、横光は自然を求めて市街地から遠く離れた森にもしばしば足を運んでいる。気分転換の意味があったのかも知れないが、同行するのは決まって画家修行中の岡本太郎と樋口某だった。四、五月にはパリ市民の間でもっとも人気のあるブローニュの森を連続して訪れている。

当地では樹下にあるカフェのテラスで寛ぎ、マロニエ<sup>はなびら</sup>の花弁がひらひらとコーヒーカップの中に舞い落ちる様を目の当たりにして歓声を上げている。また、森の中にある広大な池を貸しボート<sup>ゆうよく</sup>で遊弋したこともあるが、その時、すれ違ったボートはどれも男女のペアばかりで、そのため湖水の藻の匂いが脂粉の匂いと混じって妖しく鼻孔<sup>くすく</sup>を擽ったと、横光にしては珍



しく妖艶さが滲み出た表現をしている。さらにその時、目撃したボートのフランス人女性たちはいずれも目を見張るような美人ばかりで、そのことが癪<sup>しやく</sup>だったのか、「どちらを向いても美人揃いというものは、美人が一人もいないのと同じ事だ<sup>(49)</sup>」と彼独特の屁理屈を捏ねている。

それと相前後して、市街地から東方にあるヴァンセンヌの森にも足を運んでいる。ここでは木陰のあちこちで若いカップルが地面に身を横たえ、熱い抱擁を交わしている場面に出食わしている。これについても、横光は「パリー市民の思想は日曜日になると森へ男女で来ることだと云う説も耳にした。もうただ野蛮になりたくて仕方がないというパリー人の苦しみ。第一の自然を征服し、第二の自然の技術を尽し、第三の自然である思想を、窮極へまで押し縮めたパリーでは、どうかして第一の自然へ返りたく、野蛮な扮装<sup>(50)</sup>をしているのだ。これが第四の自然である」と彼らの行為を皮肉たっぷりに揶揄するのだった。

パリはありとあらゆる芸術感覚を総動員して造形された理想都市で、凱旋門をはじめとしてシャンゼリゼ大通りやコンコルド広場、さらにはリュクサンブール公園などが設計図通りに配置され、見る者を感動させる仕掛けになっている。謂わば、それは至高の芸術作品であって、住民たちは凡そ快適<sup>おおよ</sup>とは言い難い石造りの狭いアパートマンに住み、時間があれば近くのカフェに足を運んで、知人たちと楽しいひと時を過ごすといった生活の知恵を身に付けている。そして週末ともなれば、街全体が巨大博物館のような都心部を離れ、郊外の鬱蒼<sup>うつそう</sup>とした森に出掛けて自然と親しむのである。そのようなフランス人の巧みな棲み分けに、横光が感心したことは言うまでもない。

## 8. パリの夜の歓楽街は策謀の火花が散る仕事場で、けっしてデカダンではない

横光はヨーロッパに向かう船内で虚子が主催する句会に参加したこともあって、パリ滞在中もしばしば俳句を作って詠んでいる。「コンコルド女

神老けにし春の雨」「シヤンゼリゼ驢馬鈴沈む花曇」。これらはその一例であるが、どうもコンコルドやシヤンゼリゼといった固有名詞が、俳句の生命とも言うべき繊細な情感とじっくり来ていないように思えてならない。そのことは横光も感じ取っていたと見え、「(これらは：筆者注)巴里着即後の私の句であるが、外国で俳句を作るには発明のために句を殺さねばならぬ困難さがある<sup>(51)</sup>」とその難しさを吐露している。俳句特有の季節感あふれる情調と西欧の立派すぎる人工的景観が、「詩情」という点においてうまく折り合っていないのである。

その一方で、横光のフランス社会やそこに暮らす人々に対する理解と分析は、次のように目覚ましい進展を見せている。「フランス人は笑うことが非常に少い。笑う必要を感じぬだけの言葉があるからだ<sup>(52)</sup>」「日本製の物尺は、パリーへ来れば二倍にしなければ底へは届かぬ<sup>(53)</sup>」「文学がこの国ほど生活を指導し、一般がそれによって生活を潤沢ならしめている所を、まだ見たことがない<sup>(33)</sup>」。それに加えて、パリでは市民が喧嘩をしている光景に出食わすことはごく稀で、それは常に理屈で論じる風潮が社会に定着しているため、日本人のように安易に感情に走ることが少ないからだろうと推察している。

その一方で、この地に派遣する日本人国費留学制度について厳しい注文を付けている。「(留学期間は：筆者注)長期の必要はない。三ヶ月で結構だ<sup>(53)</sup>」「半年以上この地にいる者は必ず何らかの意味で馬鹿になる<sup>(53)</sup>」「ここには麻酔剤がいたる所から噴出している。これに気附かぬものは、つまり、眠ってしまった者ばかりだ<sup>(53)</sup>」。そして、「長くこの地にいなければ、フランスは分り難いというものは、フランスの伝統と競争しようと思うものだ。この者は死ぬ以外に方法はあるまい<sup>(54)</sup>」と辛辣な口調で叱咤している。つまり、フランスの伝統に培われた文化はそれほど奥深いもので、日本人がその深淵に迫るのは至難の業であることを知悉<sup>ちしつ</sup>していたのである。

しかし、だからといって短期間の研究で十分というのは少々、乱暴な議論である。第二次世界大戦後、最初の留学生として当地に派遣され、難解

極まらないカトリック文学研究に<sup>いそ</sup>勤しんだ遠藤周作が、このような考え方に真っ向から異を唱えたのは至極当然というしかない。彼は『旅愁』についても批判的で、自身の作品『留学』の中でパリに研究留学している主人公の大学講師、田中に「『旅愁』という小説がどんなに出鱈目な西欧解釈でしか成り立っていない<sup>(55)</sup>」と手厳しい言葉で批判させている。

パリの街が見渡せるモンマルトルの丘は、かつて葡萄酒畑であると同時にピカソなど芸術家たちの揺籃の地でもあった。そして、その麓<sup>ふもと</sup>には今日でも紅い風車が目印のムーランルージュをはじめとして、数々のキャバレーやダンスホール、バー、レストランが軒を連ねるパリ随一の歓楽街である。そこはルノワールやユトリロ、ドガ、ロートレックに加えて、エディット・ピアフやイヴ・モンタンなどを輩出した芸術芸能の聖地としても知られる。

夜の帳<sup>とぼり</sup>が降りると、そのネオン街には画家や歌手、俳優たちに加えて作家や詩人、哲学者たちも姿を見せ、それぞれ美酒に酔い痴れながら談論風発、さらには激論に身を任せて人生を完全燃焼させるのである。フランス語が堪能な荷風や光太郎たちもそこで大いに「<sup>パリ</sup>巴里の夜」を楽しみ、その享楽はいつの間にか女性との悦楽へと発展している。その相手は玄人筋の女性ということになるが、彼ら二人と違って殊の外、堅物である横光はある意味、もっともパリらしいこの地、つまりその爛れた<sup>ただ</sup>雰囲気<sup>(56)</sup>に馴染むことが出来なかった。

「巴里へ来た人はこの地の歓楽場の話をよくしたものだが、そんなものはあるにはあっても、歓楽場でもなんでもない。皆ここのは仕事場だ」  
「ここのは真面目な仕事であるから、一層歓楽が白熱する。考える暇など与えては、仕事にならぬ四苦八苦の策謀が、産業のように着実な火花を散らす。も早やこれはデカダンではない。殺気漲る手術室だ<sup>(56)</sup>」。

その中に入り込めないが故にこのような辛辣な言葉になるのかも知れないが、世界中からやって来た男たちはそのこと(「仕事」)を承知の上で歓楽に酔い痴れ、「白い娼婦たち」の肉体<sup>からだ</sup>に群がるのである。そして、横光は

言う。

「見ていると(パリでは：筆者注)どの男も女に飽き飽きし、女は男に飽き飽きしている。それにも拘らず、どっちもどうすることも出来ず、おまけの積りで男は甘いことを女に云い、女はせつせとかせいでいるという都——つまり、美人だらけで美人という事が、女にとって、何の価値にもならぬ都というものは、恐らく世界でここだけだろう」「同様に才能もここでは才能あるものばかりである。美人と才能の掃き溜めの中では、世の人々の最も誇りとするこれらのものも何らの光彩も發揮しない<sup>(57)</sup>」。

随分と屈折した解釈というほかないが、その一方で「ここでは貞操観念が失われているのではない。男が一人の女性を愛しつづける苦しさ、女が一人の男を愛する苦しさに堪えられず、どちらも楽しく、より長く相手を愛しつづけ得られるために、相互に愛人以外の男女を探すという手段。つまり互の中心を堅固にする方法として、他にそれぞれの植民地を造るヨーロッパのごときもの<sup>(58)</sup>」と一定の理解を示している。ただ、常に東西文明論が脳裏から離れなかったのか、偏<sup>ひとえ</sup>に人間的であるはずの男女関係を、西欧の植民地政策に敷衍<sup>ふえん</sup>するのは如何なものであろうか。

## 9. 独、伊など五カ国歴訪—チロルでクリスチャン、千鶴子との精神世界の違いを痛感

ロンドンからパリに戻って来て約四十日が経った六月一七日、横光はドイツやイタリアなど五カ国歴訪に向けて単身で旅立つ。まず、アルザス地方の中心都市、ストラスブールで一泊した後、翌日、国境を越えてドイツのミュンヘンに到着する。

この街はドイツ屈指の文化芸術都市だが、パリからやって来た横光の目にはそのように映らず、「どこか底の方で大きな機械がごとごと動いているような街」「ホテルも大きければ、部屋の鍵もまた大きい<sup>(59)</sup>」と武骨さばかりが目立ったようで、結局「翌朝、起きても街見物の興味さらに起らず<sup>(59)</sup>」ということになった。しかし、ここはドイツビールの本場でもある。

ホテルで「(この：筆者注)水、甚だ美味し<sup>(44)</sup>」かったこともあって、さっそくピヤホールに出掛けている。しかし、その結果は「キリンビールの方が少しばかり味良し<sup>(59)</sup>」だった。歯に衣着せぬ横光らしい評である。

一九日、列車でオーストリアのチロル地方に向けて出発した横光は、車窓いっぱい広がるアルプスの秀麗な自然美に心を打たれる。「汽車は花の中を割って進む。氷河また花の中に流れ下る所に、先きを揃えた牧場の軟草幾十里となくつづいている。波打つ花の中を自転車に乗った娘が昂然として行く」「少女がその高原の中を真直ぐに自転車のペダルを踏んでい<sup>(60)</sup>く」、まるで映画の一シーンでもあるかのような光景であるが、感極まったのか「この世にかかる美しい高原があったのか」と記している<sup>(61)</sup>。

翌日はケーブルカーを乗り継いで、山の頂近くまで登っている。ちなみに、この「チロル」の名が日本で遍く知られるようになったのは、当地を舞台に日本人男性とフランス人女性の恋愛を描いた岸田国士の戯曲『チロルの秋』によるところが大である。そこに描かれた異国情緒あふれるロマンスが若者たちの間で人気を呼び、それをきっかけに全国の学生街にある喫茶店やレストランに「チロル」の名が冠せられるようになったのである。

横光はその岸田と親交があり、彼の勧めもあってこの地を訪れたのかもしれない。そして、このチロル行は『旅愁』にも登場して、東西文明論における宗教的相克という観点において一際、重要な役割を果たしている。

『旅愁』を紐解くと、主人公の矢代耕一郎が単身、当地を訪れるが、恋人の宇佐美千鶴子がその後を追ってパリからインスブルックにやって来る。矢代が予約していたホテルで再会した二人は、激しい雷鳴とともに稲妻が雪に覆われた山々を美しく照らし出す幻想的光景を飽かずに眺める。その後、千鶴子は一旦、自分の部屋に引き揚げるが、雷鳴と稲妻が怖いと言って夜半、矢代の部屋にやって来る。千鶴子にとって、それは一種の“誘い”だったのかもしれないが、頑なまでに自制と倫理と清廉を重んじる矢代は敢えて無関心を装い、結局、二人の関係がそれ以上に進展することはなかった。

その翌日、矢代と千鶴子はバスとケーブルカーを乗り継ぎ、さらにサフラン畑を横切る山道を登って山小屋に到着する。二人はそれに飽き足らず、危険が伴う氷河を渡って山頂より少し下ったところにある丸太組みの粗末な山小屋に辿り着く。ちょうど夕暮れ時でまだ残照があったが、そのうち千鶴子は黙って外へ出て、姿が見えなくなる。

矢代は早々に煙草を吸い終え、必死になって彼女の行方を探し始める。「暫く左右の丘の上を探しているうちに、氷河の見える暗い丘の端で、じっとお祈りをしている膝ついた彼女の姿が眼についた。カソリックの千鶴子だとは前から矢代は知っていたが、いま目の前で祈っている静かなその姿を見ていると、夜空に連なった山山の姿の中に打ち重なり、神厳な寒気に矢代もひき締められて煙草を捨てた。千鶴子の祈っている間矢代は空の星を仰いでいた。心は古代に遡る憂愁に満ちて来て、山上に立っている自分の位置もだんだん彼は忘れて来るのであった<sup>(62)</sup>」。

敬虔な信仰心と清冽な自然美が見事に溶け合った神秘的光景であるが、この瞬間、矢代はクリスチャンである千鶴子が自分とは異なる精神世界の人間であることを思い知らされる。そして、男女間の恋愛の結実として「結婚」があるとすれば、この宗教上の決定的相違がその成就にとって致命的な障害になることを痛切に感じ取るのであった。横光は、矢代と千鶴子がパリから帰国する『旅愁』の後段において、このキリスト教と日本の伝統的家族制度の葛藤、さらにはその共存の可能性に的を絞って物語を展開するが、その命題の萌芽がこのチロル山中で提起されていたのである。

この山登りを終えてインスブルックのホテルに戻ると、矢代の元にパリにいる久慈から一通の手紙が届いていた。それは、「多分君のことだから、千鶴子さんが君の後を追ってそちらへ行っても、依然として前と同じことだろうと思う。しかし、人間は表現をするときには決断力が必要だ。君は外国へ来て日本という国にすっかり恋愛を感じてしまっているので、人間なんか、殊に婦人なんか問題ではなくなってしまっているらしいが、それは非常な錯覚だと僕は思う<sup>(63)</sup>」と千鶴子に向けて矢代の背中を強く押す内容

だった。しかし、実際の矢代は久慈の読み通り、彼女の決意や覚悟すら見て見ぬ振りをする優柔不断さで、しかも仏教とキリスト教の問題を殊更<sup>ことさら</sup>、深刻に考えて、心密かに千鶴子との結婚の断念すら考えていたのである。

久慈のこの手紙には、矢代と白熱した論争を繰り広げていた東西文明論についても注目すべき記述があった。「君の云うように僕も今は錯覚の連続で外国というものを<sup>(64)</sup>見ているかもしれない。しかし、君も僕とはまるで正反対な錯覚ばかりで物を見ているにちがいない」「君と僕との見方のこの正反対も、どちらが正当かということについては、恐らく今までの日本人の中では、誰一人として解答を与えられることの出来たものはいないのではあるまいか」「この重大な問題がわれわれ若者の上に、永久にこれから続くと見なければならぬ以上、何らかの方法で君と僕との意見の対立に統一<sup>(64)</sup>を与えたいと思う」。

つまり、西欧派の久慈と日本派の矢代との間で互いに相違点<sup>あげつら</sup>を論<sup>ら</sup>ってばかりいないで、そろそろ一致点を見出さないかという提案である。この段階において、横光は東西文明の融合、つまり着地点を模索し始めたのである。

## 10. 「フィレンツェの品位は年をとった美女の悲しみに似ている」

六月二日にインスブルックを発った横光はその夜、憧れのウィーンに到着する。ところが、実際に目の当たりにしたこの街は期待を裏切るもので、「来て見ると、私は何の魅力もここから感じない。相すまぬと思うが少し悪口だ<sup>(65)</sup>」と落胆すること頻り。

その一方で、「ハプスブルグ家代々の都であるから、衰えたとは云え、土の光りに脂のにじんだ後が歴然と感<sup>じ</sup>られる。街々に並んだ彫刻にしても、パリーを押すのはこの都だ。殊にステファンドムのゴシックの壮麗さはノートルダムより設計に於て優<sup>(65)</sup>れている」と過去の栄華の片鱗を見出して賞讃している。この歴史に裏づけられた伝統美に対する尊崇の念は、そこに暮らす人々にも向けられ、「この国の人々の顔を見ていると、威風

堂々として、あたりを払う風貌が多い。黙々としていても眼光が鋭く、沈毅重厚、自ら他を圧するところがある」、そして「老人に現れた品位の高さは、ウインの人々が第一等と<sup>(65)</sup>思う」と当初の落胆が信じられないほどの特上の礼讃をするのだった。

その翌日、ハンガリーのブダペストに移動して、当地に四泊している。この地の人々にアジア人の血が流れているという親近感の成せる業なのか、その思い入れには特筆すべきものがあり、この街の情景を次のように極上<sup>リリシズム</sup>の抒情で謳い上げている。

「有月がダニューブ河の上にかかる。河岸でジプシイの団が、ハンガリアの曠野の唄を弾く。一望千里の哀感胸に迫る」<sup>(66)</sup>「ハンガリアの曠野は、真紅の葵の花盛りだ。ヨーロッパの中で、一番美しい都会は、パリーとブダペストといわれている。ハンガリアの都、ブダペストは、街も自然も人も美しい」<sup>(67)</sup>「感情の豊かなところ、リリシズムの横溢しているところ、ここのごときは、ヨーロッパにその比を見ず。しかも、パリーに負けじと、その市街の壮観、設備の整頓、道路の拡張、街路樹の美しさ、東京など面赤し」<sup>(68)</sup>。

横光の欧州旅行において最大級の讃辞である。また、この街には「一町四方もあろうかと思われる大カフェ」<sup>(66)</sup>があり、その名前が「ジャパン」だったことも付記している。この街が住人たちの血縁ゆえ、「西」(西洋)ではなく「東」(東洋)に近いことに拘って、何事につけ<sup>ひいき</sup>最眞目になった観はある。

その後、横光はベニスに飛び、二八日夜には列車でフィレンツェに入っている。この美術の都についても思い入れは人一倍で、「フロウレンス(フィレンツェの英称：筆者注)の街は名画の洪水である。しかし、現実のフロウレンスは絵よりもはるかに美しい。何を好んで、博物館に入る必要が<sup>(69)</sup>あろうか」と褒め称えている。そして、「擦れ違う婦人たちにしても、フロウレンスの婦人は、ラファエロやチチアンの画中の人そっくりなのが多<sup>(70)</sup>い」と述べているが、これは感情移入の激しい横光ならではの印象と言う



べきか。

ただ、このフィレンツェをパリと比較する段になると、礼讃の勢いは一気に急降下する。「フロウレンスへ来て見て、私はパリーを一層確実に了解する事が出来たと思う。この地を中心として起ったイタリアのルネッサンスから百年遅れて侵入したパリーのルネッサンスは、総てフロウレンスの真似だったのだ」<sup>(70)</sup>「しかし、十七世紀になると、早やフロウレンスはパリーの真似をせずにはいられなかったのだ。フランス人は自身の古い伝統に、絶えず打ち勝つ新しい伝統の建設を忘れたことがなかった。これがイタリアの最後の美をさらに乗り越え、層々と並び起った新世紀の、文化の美を蒐集し創造し得たパリーの偉大な原因であろう」<sup>(70)</sup>。

つまり、パリはフィレンツェからルネッサンスを学び取って世界に冠たる「美の殿堂」<sup>の</sup>に申し上がったが、それに安住することなく、常に新しい美の創造に邁進したため、フィレンツェがその座を奪い返すことは儘ならなかったというのである。それ故、本家だったはずのフィレンツェがパリの後塵を拝し、いつまでもパリを模倣をする存在に落ちぶれたと考える。そして、「フロウレンスの品位は、美女がいつの間にか年とった悲しみに似ている」<sup>(69)</sup>とそこに気品ある老女の落魄<sup>らくはく</sup>の姿を想起するのである。

三日目にフィレンツェを発って、その日の夕刻、ミラノに到着する。しかし、この街については「大都会であるが、樹木少く、足をとどめさせない都会である。街の景観にも個性が感じられず…」<sup>(71)</sup>と気に入らなかった。それに加えて、翌朝のホテル・チェックアウトの際の気の減入のような体験が、この街に対する嫌悪に拍車を掛ける。

その朝、部屋に置いてあった灰皿のデザインが洒落<sup>しやれ</sup>ていたため、横光がそのことをボーイに告げると、彼は愛想良く「持って行ってくれ」とその灰皿を紙に包んで手渡してくれた。その気前の良さに恐縮した横光が、そのお礼にと二リラ札を差し出したところ、ボーイはまったく予期せぬ反応をする。心外といった表情で、「一〇リラ欲しい」と要求して来たのである。これには、さすがの横光も「これがヨーロッパというものか」と深い

溜め息をついたという。

その日、横光はミラノから列車でスイスに向かっている。「雪を冠ったモンブランの峻嶺がレマン湖に映り、シロンの古城を取り包んだ清澄な湖面は、幾度か写真で見たのを記憶する<sup>(72)</sup>」「夏も冷えびえとして一波も立てぬ水面は、深い谷間の底辺となり、すくくとそこに直立した山貌の厳しさは、拭き磨かれた、壮大な機械を見るかのような<sup>(72)</sup>」「私は少年のときから、幸福というものを夢想する度に、スイスの湖辺が頭に浮び、シロンの城の水辺が偶像となって現れたものである<sup>(72)</sup>」。これは、スイスのモントルーに入った時の風景描写である。午後八時半にローザンヌに到着するが、この街に対する印象もミラノ同様、「小さなパリーに湖を置いたようなもの<sup>(73)</sup>」と素っ気ない。さらに、翌日にはレマン湖を半周してジュネーブに到着したが、ここでも「ホテルと時計屋ばかりのような街<sup>(74)</sup>」と興覚めの観は拭えないようだ。

## 11. ベルリン・オリンピック取材へ、当地の様子を見て「まるで戦争前夜」と予言

十七日間に渡った横光の一人旅は、翌七月三日午後一時のパリ帰着によって終焉となる。「廻って来た五ヶ国の大小の都会が、例外なくパリーの真似を尽していたのは、あれは真似ではないのだと気がついた。ものは本格に近づけば近づくほど、軌道が一つになり、個性が無くなっていく<sup>(75)</sup>」「デカルトに始った都市国家の智的設計は、ヨーロッパから個性を奪った<sup>(75)</sup>」。つまり、訪れた街々は意識してパリを模倣したのではなく、パリそのものがヨーロッパの真髓を体現しているが故に、結果的にいずれも似通った街(設計)となって収斂されて行ったと考察するのである。

パリに戻って二十日ばかり経過した七月二四日、横光はこの欧州渡航の本来の目的であるベルリン・オリンピック取材に向かうことになる。当日の朝、岡本太郎たちが見送りにやって来ると、横光は「今日は芥川(龍之介：筆者注)さんの死んだ日だから、こりゃ、飛行機落ちるかもしれない

<sup>(76)</sup>ぞ」と軽口を叩き、寛いだ様子だった。しかし、いよいよパリを去るとなるとさすがに寂寥感が募って来るのか、『歐洲紀行』に「『だんだん帰るのがいやになって来たね。』と云うと、そこがパリーの良さだと皆云う。パリーに長くいる人は帰るときには泣くそうだ。地球の上にこのような都会が一つあるのは人類の誇りであらう<sup>(77)</sup>」と記している。数々の辛辣な言葉を投げ掛け、一時は忌み嫌ったパリであるが、心の内ではこの街が世界屈指の魅力に富んだ街であることを容認し、密かに敬愛の念すら抱いていたことは疑うべくもない。

そのようなパリを後にして、横光は空路ドイツに向かい、同日午後四時、ケルン経由でベルリンに到着する。ヒトラーがドイツ人の優秀さとその帝国の威厳を喧伝するために開催したオリンピックとあって、当地は愛国主義と国威発揚一色の様相を呈していた。横光が降り立った空港はロビーや通路のどれ一つを取っても塵ひとつなく、市の中心部に向かう道路も横光の形容を借りると「砥石のように磨き抜かれていた」のである。

これこそ、何事にも徹底した「完全」と「秩序」を実現しなければ気の済まないドイツの集団主義の反映でもあるが、横光はこれに言い知れぬ違和感を抱く。「路の両側の建物はみな五階だ。重厚な石の建物はどれも同じで均衡がとれている」<sup>(78)</sup>「パリーの町の建物の中を歩いている時には、山の頂きを仰ぐような感じであったが、ここベルリンの建物の下では岩石の谷間を歩いているような感じである。町に起伏がなく何処まで行っても同様な町ばかりだ」<sup>(79)</sup>。

飽くなき無駄の排除と完膚なきまでに実利的で画一的、そして権威の裏づけとしての重厚な形式美を重んじるドイツ人好みの街並みである。しかも、オリンピックとあって完璧な清掃と徹底した外観修復が施されている。自由と無責任と怠惰が横溢<sup>おういつ</sup>しているパリからやって来た横光にとって、その寸分<sup>すき</sup>の隙もない街はまるで軍服を纏<sup>まと</sup>った要塞のようなもので、横光はそれに言い知れぬ息苦しさを覚える。

「建物と建物の間に隙間が一つもないということは、人間の心に窓のな

いと同じである」<sup>(80)</sup>「パリーの町ではわれわれの眼は市街の彫刻にさ迷い、商店の装飾に戯れ、マロニエの幹の優雅さに休息し、街々の起伏や人々の上に憩い得られた自由さがあつた」<sup>(80)</sup>「此処では最初に一目見たもの許りが何処までも続くのである。このようになれば、人の心の鍛錬の仕方は忍耐許りとならざるを得ない。この市街の人々の心が団結のままに動くのも尤もだと思ふ」<sup>(80)</sup>。

この段に至って、パリは自由奔放で自堕落だったかもしれないが、<sup>そこ</sup>其処<sup>かしこ</sup>彼処に人間味が溢れている素晴らしい街だったと思ひ返すのである。このように、ベルリンにおいてパリを懐かしみ、さらに故国の東京へと想いを馳せる。「ここから思うと、日本の市街はその汚さのために何という豊富な自由さがあることだろう」<sup>(80)</sup>。痛烈なアイロニーではあるが、ベルリンより東京の方が遙かにマシと言うのである。

いずれにせよ、このベルリンは全市民にヒトラーの絶対命令が浸透しており、その強制統治にファシズムの狂気と恐怖が色濃く投影されていることを横光は鋭敏な嗅覚で察知する。そして、「人間の心もこのように清潔になれば戦争をするより希望はなくなるのかもしれない<sup>(81)</sup>」と衝撃的な予言をしている。

このような暗澹たる気持で、横光は八月一日のオリンピック開会式を迎える。その式典雑感や観戦記を送稿するために大阪毎日・東京日日新聞から特派されていたわけだが、横光はまったくそのような気持ちにはなれなかった。実際、『<sup>あんたん</sup>歐洲紀行』に「書け書けと喧しい新聞社の催促を受けるが、ペンを持つ気さらになし」<sup>(82)</sup>とある。独裁者ヒトラーの片棒を担いでなるものかといった反発があつたのかもしれない。

そして、三日にはそれを象徴するかのような不快極まりない体験をしている。「買い物をして店を出ようとすると、店主の老婆がさようならの代わりに、『<sup>(82)</sup>ハイル・ヒットラア』と言う」がそれで、一般人である老女が外国人である横光に対して、挨拶代わりに手を前方に差し出すヒトラー独特のポーズを執つたのである。横光はそれに呆気に執られるというよりは、

虫唾<sup>むしず</sup>が走るような激しい憤りを覚える。そのようなこともあって、横光はベルリンに長逗留する気はさらさら無く、女子二百メートル平泳ぎで前畑秀子が優勝するのを見届けた後、早々に列車で帰国の途に就くのである。

## 12. 帰国直後に銀座で「日本的なるもの」を再発見して襟<sup>えり</sup>を正す

この帰国行はモスクワ経由のシベリア鉄道を利用したもので、横光は食堂車で『狭き門』の作家、アンドレ・ジイドの姿を目撃しているが、声を掛けることはなかった。モスクワで一時、下車した後、ユーラシア大陸を東方に向けて横断し、一九三六(昭和一一)年八月二五日に連絡船で釜山から下関に帰着する。

そこから特急「富士」で神戸を目指すのだが、その列車の食堂車に一步、足を踏み入れた時、横光(矢代)は東西文明の狭間で揺れながらも逞しく生きる日本人の姿を目の当たりにして衝撃を受ける。

「ナイフとフォークを使う人人の手の早さが刀を使っているようで、狭い車内の傾いて飛ぶぐらぐらした中でも、揺れつつ肉を突き刺し巧みに口へ入れていた<sup>(83)</sup>」「それはもう西洋でもなければ東洋でもなかった。まさしくそれは世界で類のない一種奇妙な生の躍動そのもののような姿態<sup>(84)</sup>だ」。

つまり、横光(矢代)は西欧の地において東西文明の間に屹立する厚い壁をまざまざと見せつけられたが、この食堂車の光景を見ていると、日本人はすでに「西洋」を自家薬籠中の物にしていることを思い知らされる。そして、東西両文明の養分を摂取したその姿は、横光の<sup>まぶた</sup>瞼には「西洋人」でも「東洋人」でもないように映ったのである。そのことは、日本人が東西文明の狭間で漂う特殊な存在であることを意味し、横光はそこに日本人の「孤独」を痛感する。

神戸で途中下車した横光は姉の嫁ぎ先に向かい、その後、大阪毎日新聞社の帰国歓迎昼食会に出席、文芸誌の対談にも臨んでいる。そして三日後の二九日午後四時四〇分、特急「桜」で東京に帰着するのである。横光にとっては約半年ぶりの東京である。「日本的なるもの」が恋しかったのか、

横光はその足で銀座にある馴染みの鮎屋すしやに向かっていく。

『旅愁』も同様の内容で、矢代は鮎屋の懐かしい暖簾のれんや漆黒のつけ台、そして出された緋色の鮎マゴロの色合いに目を細め、故国に戻って来たことを実感する。そして、「鮎が出たとき、彼は箸でとるより指で摘んでみたくなってつづけて幾つも口に入れてまた皿を変えた。身体の底に重く溜ってゆく寿司の量が、争われず自分の肉となり、血となる確かな腹応えを感じさせた」と自分が正真正銘の日本人であることを実感する。そこを出た後、矢代は「日本」との再会に余程、感激したのか、「ここは自分の生れ出た土地で、墳墓の地だと思い、いつの間にか人は識らずに自分の屍を埋める場所を、こんなに探し廻っているのだ」と呟くのである。

続いて訪れたのがやはり銀座のおでん屋で、ここでは長い間、目にすることのなかった日本の伝統精神に触れて感激している。「おでん屋の前まで来たとき、彼(矢代：筆者注)は何げなく敷居を跨ごうとした足を思わずまた引っ込めた。入口の敷居の土の上に、一握りの盛り塩が円錐形の姿を崩さず、鮮やかな形で眼についたからだった」<sup>(86)</sup>「いつも人に跨がれ、踏みつけられたりしていたその塩であった。それが闇の中から、不意に合掌した祈りの姿で迎えてくれていた」<sup>(87)</sup>。

そして、「物いわないその清楚な慰めには、初めて彼も長途の旅を終えた感動を覚えた。彼は襟を正して黙礼しつつ敷居を跨いだ。跨ぐズボンの股間から純白のいぶきが胸に噴き上り、肅然とした慎しみで、矢代は鼻孔が頭の頂きまで澄み透るように感じた」とまるで神懸りのような幽玄の世界に誘われるのである。

このように横光は一連の“帰国儀式”を終えた後、午後一〇時三五分、上野発の夜行列車で妻と子供たちが待ち受ける山形県・庄内鶴岡の妻の実家へ向かう。翌日、家族たちと再会して、しばし水入らずの時を過ごした後、妻の実家からほど近い温泉場に逗留する。パリで宿泊したホテルのいずれもがバス付きでなかっただけに、大の温泉好きであった横光はそのストレスを一気に解消するかのようになり、存分に湯船に浸かって長旅の疲れを

癒すのだった。

そして、東京に戻った後の一九三六(昭和一一)年十一月、『旅愁』の雛形となる短編『厨房日記』を執筆して発表する。そこでは、東西文明の差異や比較がその滞在体験を通して生き生きと描かれている。

「日本の女は外国の女よりもっと美しいと虚勢を張って云って来たが、どうして満洲まんしゅうからこっちへ這入はいって来ると、全く美しいのにびっくりした<sup>(88)</sup>」「あれほど大都会の中心を誇っていた銀座は全く低く汚く見る影もなかった」「寒そうに吹く風の中をモダンな姿で歩く人影も、どこの国の真似まねともなく一種すすけた蕭条しょうじょうとした淋しみしさを湛たたえていた」「日本の文化は物の中側にある知的文化が特長だと常に思っていたが、しかし、外から見かけたこの貧寒ひんかさを取り除けるためには、少なからざる虚栄心らんびの濫費らんびをしなければ西欧に追いつけるものではなかった」「まだまだ日本の内側は火の車だ<sup>(89)</sup>」。

これは主人公である梶の独白であるが、ここに述べられている東西文明の相克は実に具体的で、『旅愁』と比べると遙かに分り易く、『欧洲紀行』の小説編おもむきといった趣を呈している。

また、帰国後あらわに記した「巴里から帰って」にも、フランスに対する率直な感想が述べられている。「六十、七十から語学を始め、十六、七の少年を対等に尊敬し、独立独行、齢を眼中に入れざるフランス人の態度の基礎は、自身の年齢から青春を常に発見する努力にあり<sup>(90)</sup>と思う」「私がパリ滞在中に最も羨ましく感じたことは、この国の老人の美しさと豪さであった。個人主義の徹底は、男子をこのようにするものかと、私は常に老人の観察に注意を向けたが、老人を老人らしくする日本人の修養は人生を幸福こたわならしめる修養とは、最早あらわやならないことを知るにいたった<sup>(90)</sup>」。

これは「論」に拘こたわらず、事実関係に立脚した素直な観察結果というべきものである。彼の代表作である『旅愁』では、東西文明の相克という観点から西欧に対する否定的姿勢が顕あらわになっているが、ここではフランスの少年と老人を取り上げ、年齢差を超越して機能する自由主義と個人主義の素

晴らしさを賞讃している。

このように、横光は西欧体験を発表媒体ごとに書き分けているわけで、そのような事実を勘案すると、物語が脈絡を失って漂流を重ね、失速の憂き目に遭ってしまった『旅愁』を正確に読み解くには、これら『厨房日記』や『欧洲紀行』などが大いに参考になると思われる。『旅愁』に次いで広く読まれている『欧洲紀行』は横光がヨーロッパ滞在中、新聞や雑誌に寄稿した紀行文、エッセイ、手紙類などをまとめて翌一九三七(昭和一二)年四月に刊行されたものである。

### 13. 『旅愁』における矢代と久慈の白熱した東西文明論争

そして、長編小説『旅愁』は同月一四日から八月六日にかけて、大阪毎日新聞と東京日日新聞に同時連載される(計六十五回)。挿画は、パリで大成功を収めた画家、藤田嗣治の手による。

主たる登場人物は横光の分身である国粹的な保守思想の持ち主である矢代耕一郎、そして彼と激しく東西文明論を戦わず西欧派の久慈という青年、さらに矢代の恋人になる宇佐美千鶴子である。矢代は内向的な性格で、母方の叔父が経営する東京の貿易商社に勤めており、その叔父の計らいで「歴史の実習かたがた近代文化の様相の視察に来た」<sup>(91)</sup>。一方、久慈は西欧に対して憧憬の念を抱く陽気な性格の持ち主で、「社会学の勉強という名目のかたわら美術の研究が主」<sup>(91)</sup>という学徒だが、特定の大学に通うわけでもなく、謂わば高等遊民のような存在である。渡航時、横光は三十八歳だったが、矢代と久慈はそれぞれ二十歳代末から三十歳代前半、さらに名家の令嬢である千鶴子は二十歳代前半という設定になっている。

それに加えて、三人のお目付役のような存在だったのが、パリで俳句三昧の悠々自適の生活を送る年輩の元作家、東野である。彼のモデルは高浜虚子ということになっているが、東西文明論に関する彼の発言内容を斟酌すると、その正体は横光の化身だったと思えてならない。そのほか、ウィーン駐在の夫を尋ねて行ったものの、その夫に愛人がいたことが判明し



たため別れ、パリに戻って来て久慈と懇ろになる早坂真紀子という婦人。さらにフランス語が達者な写真家の塩野も登場するが、このモデルは横光が昵懇にしていた十三歳年下の画家、岡本太郎だった。

パリを舞台にして、彼らに西欧と日本の間に横たわる文明の相違を実体験させ、その相克を浮き彫りにしてみせるという筋立てである。これについて、関川夏央は「欧州文明になじめず日本を懐かしむ青年と、欧州に生まれず日本に生まれたことを悲しむ青年、ふたりの男のあいだを揺れる若く美しい日本人女性という構図が脳裡にえがかれる。それは現代日本そのものような揺れである」「その若い女性(千鶴子：筆者注)の原型が(横光の：筆者注)妻千代である限り、欧州びいきの青年に勝ち目はない」「どうしても横光が自分を投影してしまう日本を懐かしむ青年の、物語上で勝利は明白、だからこそ「横光はそこに人工的な障害を設定せずにはいられなかった<sup>(92)</sup>」と考察する。その障害こそ、千鶴子のキリスト教信仰という宗教的課題だったのである。

いずれにせよこの作品が、西洋近代文明の洗礼を受けながらも、日本の伝統的な精神文化の信奉者である横光が、両者間の軋轢や葛藤、さらには共存の可能性を模索するという野心的な思想小説だったことは疑うべくもない。新聞連載の後、一年九ヶ月の空白期間を置いて、一九三九(昭和一四)年五月から「文藝春秋」に続編が連載される。

そして、矢代と千鶴子がパリから帰国して、二人の結婚の前にキリスト教が立ち塞がるシーンが登場するのは一九四二(昭和一七)年一月号からである。その直前、太平洋戦争が勃発しており、東西文明は現実世界において既に決定的な破綻状態に陥っていたことになる。ところが、小説の中の時空間は依然として日華事変勃発以前で停止しており、その時間的乖離は最終稿の一九四四(昭和一九)年の「文学界」(二月号)の段階では約七年にも達していた。

それでは、横光が『旅愁』において問題提起しようとした論点は一体、何処にあったのだろうか。横光はそれを矢代と久慈の文明論争という形で

表現しているが、端的にいうと、その概要は「近代」対「伝統」、「合理」対「精神」、「都市」対「自然」、「科学」対「宗教」といった対立構図として表象される。以下に列挙した会話は、これらに関する論争を『旅愁』から抜粋したものである。

イタリア料理店で晚餐をとっている時、久慈が矢代に「ここ(パリ：筆者注)じゃ、日本の理窟は通らないんだからね、郷に入れば郷に従ってこと、君、知ってるだろう」「これだけは万国共通の論理だよ」、それに対して矢代は「そんなら、日本へ来ている外人はどうなんだ。日本人だけが郷に入って郷に従わねばならぬのなら、何も万国共通の論理の権威はなくなるじゃないか」と反論する<sup>(93)</sup>。西欧と日本は同等であるべきと考える矢代の、西欧の論理は日本より上と信じて疑わない久慈への逆襲である。

また、カフェで矢代が周囲を見渡しながらか、「ここにいる外人たち、みなパリへみいらを採りに来て、みいら採り皆みいらになって本国へ帰っていくのだからな。気の毒なものだ」と呟くと、それを耳にした「久慈の顔にさっと紅がさすと、毒毒しい皮肉な微笑が一瞬唇を慄わせた」。しかし、久慈は矢代の言葉に反論せず、心の中で「たしかに自分はパリのみいらにいつの間にかなりかかっている。しかし、矢代は何んだ。日本のみいらになっているじゃないか」と忌々しく思う<sup>(94)</sup>のだった。

そして、久慈は「歎息をもらすと、『あーあ、どうして僕はパリへ生れて来なかったんだろう。』と肘ついた掌の上へ頬をぐったりと落して呟いた<sup>(95)</sup>。それを聞いた矢代は「胸底から揺れ動いて来る怒りを感じて青くなった<sup>(95)</sup>。そして「僕はヨーロッパが日本を見習うようにしたら、どんなに幸福になるかとそればかりこのごろ思う<sup>(95)</sup>ね」と久慈を挑発すると、『『ふん。』久慈は鼻を鳴らしてボーイを呼んだ』とある。二人は、このような思慮分別に欠けるたわいない諍<sup>いさか</sup>いをパリ滞在中、延々と続けるのである。

カフェを出た後、矢代は「この久慈という聡明で高級な日本人に、どうしてこのような馬鹿な心がひそんでいるのか」「残念でたまらぬ<sup>(96)</sup>」と嘆息を漏らした後、その久慈に「知識というものはたしかに人間を馬鹿にする

ところもあるんだね(中略)こんな所へ来て嬉しがっている人間は、まあ、嬉しがるとお芽出度いところがあるんだな<sup>(96)</sup>と辛辣な言葉で喧嘩を吹っ掛ける。それに対して、久慈も負けていない。「何を君は怒ってるんだ。君は日本にもう一度、<sup>ちよんまげ かみしも</sup>丁髷と袴を著せたくてしようがないんだよ」と言い返すのである。

二人の論争は西洋の合理主義と近代化、さらにそれに<sup>きおき</sup>裨差す日本人の愛国心の是非にも及び、双方ともに一歩も引かない<sup>かかんがくがく</sup>侃侃諤諤の議論へと発展して行く。

矢代「君は合理主義者すぎるんだよ」、久慈「(矢代は：筆者注)愛国心を履き違えているんだ」、矢代「馬鹿を云え。愛国心に合理の愛国心だの非合理の愛国心だのって区別あつてたまるか。そんな区別をするのが、植民地の愛国心というものだ」、久慈「いや、合理の愛国心というものはある。これこそ新しく生じて来た近代の愛国心というものだ。これこそ新しい心の対象となるべき精神だ」、矢代「愛国心に古いも新しいもあるものか」、久慈「合理主義の近代に古典主義の愛国心じゃ、生れて来る青年は皆古典になっちゃう。青年を古典にしちまったら、科学も死ねば、国も死ぬ<sup>(97)</sup>」、久慈「批評精神から愛国心が起つてこそ健全というべきだ」、八代「いや愛国心に理窟はない」<sup>(98)</sup>「合理的愛国心なんて不合理も甚だしい」。

この激しい遣り取りでは、西洋の近代主義と合理主義、それに対抗する形で愛国心の在り方が論じられている。矢代が日本固有の愛国心があつて当然と訴えるのに対し、久慈は西洋的愛国心は合理主義に立脚しているが故に普遍性があると主張する。これは偏狭な民族主義と表裏一体の関係にある愛国主義に対する批判だが、西欧列強の植民地主義を念頭に置いた矢代は、それぞれの国に独自の愛国心があつて然るべきと考えるのである。

#### 14. 二人の行司役のような存在の元作家、東野が双方に厳しく諫言

このような感情的とも思える白熱した議論に静かに耳を傾け、その行司役のような存在だったのが、人生経験豊富な元作家の東野である。

ある時、久慈がその東野に「僕は毎日、この矢代と喧嘩ばかりしてるんですよ、この人はひどい日本主義者でしてね。僕はどうしてもヨーロッパ主義より仕方がないと思うんですが、あなたはどちらですか」と問い掛けている。賛同してくれると信じて疑わなかった久慈の意に反して、東野は「今まで合理主義で世の中が物を云って来て、どうにもならぬということを見つけたのが、近代ヨーロッパの懐疑主義というもんじゃないかな」と穏やかな口調で久慈が信奉する西洋合理主義に疑問を呈する。

予想外の返答に久慈は色をなし、「しかし、それじゃ(中略)結局暴力でもそのまま認めなくちゃなくなってしまうでしょう」と反発する。パリにおける政治的対立に端を発した暴動を念頭に置いた反論である。しかし、それに対して東野は間髪を入れず、「知識というものは合理主義から、もう放れたものの総称をいうのですからね。暴力なんてものを批判するには、手ごろな簡便主義でも結構でしょう」「君のは科学主義じゃない簡便主義だ」と久慈のややもすると教条的すぎる西洋主義を切り捨てるのだった。そして、それに追い討ちを掛けるかのように、東野は「もし自我を真に君が信用するなら、日本人という自分を信用するに定まっているのだ。ところが君は、日本人を信用したことがない。公約数ばかりを信用して、それが自我だと思っている。そんなら、君の自我はどうしたんだ。君の中の日本人はどうしたのだ」、さらに「もう君は日本へ帰ったって君の考えは通用しない」と最後通牒にも等しい鉄槌を久慈に加えたのである。

つまり、常に西洋礼讃を口にするが、久慈の依って立つところの日本人としての矜持は一体、何処にあるのか、日本人としての自我は持っているのか、いや、君にはそれが無いという断罪である。これこそ、横光の本心が色濃く投影された言葉であるが、その一方で、東野は居合わせた矢代にも一太刀を浴びせている。

「君もまだだよ。君は人間の過去ばかり考えたがる。それはいかん」「君のいつも云うことは人間の過去の美しさを信頼して物事考えてるだけだ。それじゃつまらん」。まさに、快刀乱麻の凄腕文明批評家といった風

情である。それでは、『旅愁』における東西文明論の帰結は如何なるものかとなると、東野の一連の批判が光彩を放った割には、一向に中身が見えて来ないのである。

いずれにせよ、この東野の諫言を機に「もう日本へは帰りたくない」<sup>(106)</sup>が口癖だった久慈の心境は微妙に変化し始め、心なしか弱気になって行く。そのことを敏感に察知した千鶴子は、相も変わらず久慈批判を繰り返す恋人の矢代を次のように諫めている。「久慈さんだって、口でだけあんなに仰言<sup>おつしや</sup>っていらっしゃるのよ、先日もあたしに、パリもいいけれども日本もいいなアって仰言<sup>(107)</sup>ってから、こんなこと、矢代君にはうっかり云えないがってそう仰言<sup>(107)</sup>ったわ」。

このように、久慈は密かに恋心を抱いていた千鶴子に本心を打ち明けていたのである。そして、それを機に久慈は論敵だった矢代に歩み寄りを見せて、次のような複雑な心中を吐露している。「僕らがこうしてパリの街を歩いていて(中略)どういうものだから、どっか胸の底で一点絶望しているものを感じるね」「何んというか、眼にするものを尽く知り尽そうとしていら立つ精神が、これやとても駄目だと知って投げ出された後の、まアいわば、あきらめみたいなものだよ」「ここは戦場と同じだね。頭の中は弾丸雨飛だ。看護卒が傍へ助けに来てくれても、こ奴までピストルを突きつけやがる。もう僕もだいぶ負傷をしたよ」<sup>(108)</sup>。

つまり、身も心も「西洋」に捧げ、それに熱い想いを捧げて来たというのに、自分が日本人という異分子であるためなのか、この地でその一員として受け容れられることはないという慙愧<sup>ざんき</sup>の念の告白である。あるいは、日本人として西洋の論理について行けないという諦め<sup>あきら</sup>があったのかもしれない。いずれにせよ、ここで注目すべきは矢代がマルセイユ上陸直前、西欧を敵と見做して「戦場」と呼んだが、この段に至って西欧派の久慈も同様の「戦場」「弾丸雨飛」「負傷」という言葉を使っている点である。つまり、この点において二人の西洋観は一致を見たわけで、ここに横光が意図した東西文明論<sup>しゅうれん</sup>の収斂の一端が垣間見えるといっても過言ではない。

そのような傷心を抱いた久慈をヨーロッパに捨て置き、横光は矢代と千鶴子を帰国させている。東西文明論は生煮えのままだが、帰国後の物語は専ら二人の結婚とその障害となるキリスト教の受容をめぐる展開に終始する。東西文明論に関しては、謂わばマクロからミクロへの方向転換であった。これについて東郷克美は「失速・混迷する久慈を(中略)排除することで、彼が抱えていた問題を回避したとき、作者は思想的平衡感覚を失い、作品は偏向への歯止めがきかなくなった」と分析している。<sup>(109)</sup>つまり、マクロ的観点では小説の着地点が見出せないため、急遽、主題を変更することにしたというもので、そのせいもあってか、この長編小説は前半と後半で大きな段差が生じ、無理やり接木をして物語を続けた観が否めない。

## 15. キリスト教との宗教的相克の前に唐突に登場した「古神道」

西洋合理主義の論理を容認せず、ひたすら日本の伝統精神を信奉する矢代にとって、西洋文明の核心といっても過言ではないキリスト教との対峙は避けられない宿命だった。それはマルセイユ到着以来、横光が終始一貫して抱き続けたキリスト教に対する懐疑と反発を反映したものである。

矢代の父の生家は遠い昔、九州豊後国の大内氏の将で、宇佐に居城を構える重臣だったが、その城はキリシタン大名だった大友宗麟の軍勢によって滅ぼされる。しかも、大友軍はヨーロッパから導入した最新鋭の大砲によってその城を攻め落としており、矢代の先祖はキリスト教と西洋の科学技術によって滅ぼされたという構図になる。横光が何故、このような設定にしたのかは定かでないが、執筆時、太平洋戦争が勃発していたこともあり、それがこのような筋立てを生む遠因だったのかもしれない。

そして、自身の家系に纏わるこのような忌まわしい過去を千鶴子に打ち明けた矢代は、「あなたがカソリックだと分れば、それからが厄介なところがありそうですね。何しろ僕の母は法華なものだから、これは曲げようにも曲がらない」<sup>(110)</sup>「僕の父は家代代の真宗なんですがね。母ひとりでは法華なんです」「そこでひとりいつも苦しんだらしいのですよ」<sup>(111)</sup>と苦渋に満ち

た表情で語り掛ける。つまり、同じ仏教徒であっても、宗派の違いによって葛藤が生じることを述べているのである。

そして、「じゃ、あなたはどちらですの」という千鶴子の問い掛けに対し、矢代はきっぱりと「僕は古神道です」と答えている。これは仏教でも神道でもなく、キリスト教と共存可能なものとして矢代が周到に用意した信仰である。そのことは、「(結婚に対する：筆者注)危惧を取り払う努力をするには、何か適当な他の力を籍りねばいられぬ」「どこからそれを探し出せば良いのだろう」「日本の中にあるものでは、古神道以外に先ず矢代<sup>(112)</sup>には一つも見つからなかった」という記述から明白である。

この古神道について、矢代は必死になって説明をしている。「(古神道は：筆者注)一切のものの対立ということを認めない、日本人本来の非常に平和な希い」「ですから、たとえばキリスト教や仏教のように、他の宗教を排斥するという風な偏見は少しも無い」「千鶴子さんなんかの中にも、この古神道は、無論流れている<sup>(113)</sup>」。あまりにも我田引水の解釈という他ないが、千鶴子はその存在を知らなかったため、多少、疑心暗鬼に陥った様子を見せる。

また、矢代は日本の古い祠の本体は幣帛として、そこに古神道と幾何学の密接な関わりがあると主張する。また、古神道は自己浄化のために「みそぎ禊」を行っている点にも言及する。前者は西洋の科学主義との共存、後者は西洋文明によって魂の喪失危機に立たされた日本人が「秘儀」によって自己純化を図るというのである。

ただ、それらのいずれも取って付けたような観が拭えず、強引にキリスト教との同調と共存を図ろうとしているように思えてならない。当然のことながら、この点に関して文壇からは批判が相次ぐ。東郷克美は「まさに矛盾を超越し、非論理を論理とするための御幣かつぎのドグマだ。次々に繰り出され、さまざまに弄ばれるドグマの中でも、もっとも荒唐無稽なドグマである。これこそ矢代の軽蔑する『夢遊病者の夢』でなくて何である<sup>(114)</sup>う」と一刀両断する。さらに藤沢周平に至っては、「矢代は次第に日本的

な精神主義に傾き、ついに『みそぎ』を言い出すようになったところ(このへん、記憶が非常にあいまいだが、矢代は古神道に踏みこんで行くのだったかと思う)で、私はふとページを閉じて、それっきり『旅愁』も横光のほかの著作物も読むことなく、今日に至ってしまった」(「半生の記」と述べている。この屁理屈<sup>へりくつ</sup>と批判されても致し方のない論理によって、遠く隔たった西洋と日本の宗教世界を橋渡しする試みは、文壇ばかりか読者の間でも首を傾げる人が多かったことは疑うべくもない。

矢代が千鶴子に古神道について語っているのは、『旅愁』の中では一九三六(昭和一一)年一二月のことだが、横光が実際にそれを執筆していたのは一九四二(昭和一七)年の秋だった。つまり、太平洋戦争が始まって既に一年が経過した時である。横光は日本文学報国会小説部門の幹事長に就任して戦争礼讃の一翼を担い、『旅愁』に登場する禊<sup>みそぎ</sup>の行事にも参加しているのである。

このような宗教をめぐる迷走が続いた末、当初、矢代と白熱した東西文明論争を展開していた久慈は、最終章になってようやく「帰国」という形で再登場する。

「久慈帰国」の報に接した矢代は、「(二人は：筆者注)千鶴子と矢代や、真紀子や久慈より、はるかに深い夫婦<sup>(115)</sup>だった」という思いを新たに、早速、同じ日本人として仲良くやろうという和解にも似た内容の手紙を彼に送っている。それから間もなくして、元作家の東野の講演会が日比谷であり、そこで矢代は久慈と再会を果たすのである。

しかし、そこで展開されたこの物語のエンディングともいべきシーンは、矢代と久慈の間ではなく、久慈と東野の間の会話にあった考えるのは、果たして筆者だけであろうか。パリで久慈に厳しい諫言<sup>かんげん</sup>をしたことのある東野は徐<sup>おもむろ</sup>に久慈と盃を交わし、その後、次のようにしみじみと語り掛けるのである。

「『僕はパリじゃ、君にぼんぼん当り散らして失礼したが、もうあんなことはやらないよ。当時は実際失礼した。随分僕らは苦しかったり、愉し



かったり、しかし、考えてみると、何んだかよく分らないね。君もだろ。』  
『うむ。』と久慈も頷いて東野に盃を返した。『それで良いのだよ。分つたら嘘だ。事物の自然化だとか、科学化だとか、そんなことを云ってる暇に僕らの生命力は、誰やらじゃないが、榴散弾みたいに進んでゆく。二度と同じことを繰り返さないよ。新しくなるばかりだ。西洋が良いの、東洋が良いのといったところで。おい、君、僕は近ごろ女房を亡くしてね、このごろじゃ、空(くう：筆者注)というものの美しさが初めて分って来たのだよ』<sup>(116)</sup>

西洋の近代文明は合理主義や客観主義、科学主義を殊の外、重視するが、この東野の言辭はそれらを東西文明論と絡めて考察したものではなく、力尽きて帰国した観のある久慈を慰撫<sup>いぶ</sup>し、矢代の手紙と同様、同胞であることを強調して力づけるものだった。そして、パリで盛んに議論し合った肝腎の東西文明論争については、「よく分らない」「分かつたら嘘だ」といった驚愕すべき言葉が並ぶ。挙句の果てに、奥さんを亡くして「今は『空』というものの美しさが分かって来た」というのだから、それは如何にも日本的な禪問答という他ない。つまり、偏<sup>ひとえ</sup>に人の心の中に宿る「虚無」によって、議論百出の東西文明論を封じ込めた観が無きにしも非ずなのである。当然、このような結論に西洋近代主義の論理が反映されていないことは言うまでもない。それほど横光がこの物語の着地点を見出すのに難渋していた証左でもあるが、これが『旅愁』の到達点だとすれば、あまりにも安易すぎると言わざるを得ない。

結局、東西文明論を大命題とするこの物語は、前半はその主題に沿った展開だったが、後半に入るとキリスト教問題に焦点が当てられ、最後には読者にとって馴染みの薄い「古神道」の登場という荒唐無稽さを露呈するに至った。つまり、迂<sup>つじつま</sup>々<sup>あ</sup>合わせの論理展開に終始したわけで、この物語が方向性を失って漂流を続けた最大の原因は、後段における「久慈の不在」だったのではなかったか。西洋文明をもっとも体現し、挙句の果てにそれに打ちのめされた久慈こそ、矢代以上の存在感があったと思えるのだが、

横光はその主役を表舞台から降ろし、キリスト教と仏教、そして古神道をめぐる難解極まりない宗教問題に時間を浪費してしまったのである。

それに代えて、久慈がヨーロッパに残って一体、どのような異国生活を送っていたのか、その過程でどのような心境の変化を来したのか、また、どのような気持ちで帰国の途に就いたのか、そして帰国後、憧れの「西洋」を胸に抱きながらどのような人生を歩んだのか—これを書かずして『旅愁』は幕を閉じることが出来なかったように思える。

## 16. 『旅愁』 批判と横光に対する「先駆者」「犠牲者」「殉教者」という称号

このように意に添わぬ形で事実上、未完の形で終わらざるを得なかった『旅愁』であるが、戦後、更なる試練が待ち受けていた。敗戦を受けて、アメリカの占領軍が日本を支配することになるのだが、出版社は検閲を先取りして横光に『旅愁』の自主的な修正を要請する。東西文明論争の中で矢代が声高に主張していた日本至上主義、それに伴う欧米批判と受け止められかねない箇所に対する修正で、結局、それが「戦後版」になるのだが、横光が受けた屈辱感は想像を絶するものがあつたに違いない。

ここに至るまで『旅愁』が内包する矛盾や問題点を列挙してきたが、文壇において先の藤沢周平以上の舌鋒で批判を展開したのが加藤周一である。彼は多くの日本人作家たちの洋行を「まさに自然にはじまり、自然に終わっている。自然以外のところでは、ろくな観察はなかった」と断じたうえで、その中でも極端な例が横光であると名指ししている。そして、「『旅愁』は作者がまったく理解しなかった西洋思想に関する幼稚で空想的な議論に溢れている」と辛辣な言葉で酷評しているのである（「果して『断絶』はあるか」）。

横光の「昭和」という時代に対する視座は、西洋文化を無批判的に受容して来た知識人たちの「内なる西洋」に対する懐疑、さらにアジアを始めとして世界を席捲する欧米列強の帝国主義的植民地支配、それに加えて日

本自身の大陸侵攻という重層的な諸矛盾を衝く包括的な批評だった。ところが、吉本隆明はこの点に異議を唱え、『旅愁』では「アジア」という視点が著しく欠落していると指摘するのである。

その一方で、横光が「東西文明」という大命題に勇猛果敢に取り組んだ姿勢を積極的に評価する声もある。大久保喬樹もその一人で、「その(横光の：筆者注)論理はしばしばあまりに大風呂敷、大雑把、支離滅裂で理解に苦しむところも少なくないが、それでも、そうして悪戦苦闘する過程をそのままさらけ出す横光の思索の跡をたどっていくうちに、この時代の予言者が何に取り組み、何を求めようとしていたのかということがまざまざと浮かびあがってくる」「この現代史の転換期に、その転換の最前線に立ち会って、横光は、この転換の世界史的意味とは何なのか、日本はこの転換にどう対応すべきか、どういう方向にむかって進むべきなのかをひたすら考えつづけていた<sup>(117)</sup>」と肯定的に捉えている。

河上徹太郎も同様の見解で、「この小説に盛られた作者の意図は、非常に野心的な思想小説である。その成功不成功や、これを盛る手際を別にしていえば、わが近代文学で何人も企てなかった世界に踏込んだものであり、且何人かがこれを実現せねばならぬものであった<sup>(118)</sup>」「私は、こういう問題の提出をせねばいられなかった横光氏の誠実さには、絶対の信を置いてい<sup>(119)</sup>る」と、これもまた礼讃とは行かないまでも積極評価の立場なのである。

当世随一の辛口の文芸批評で知られる亀井勝一郎も「(横光は：筆者注)近代ヨーロッパの洗礼を受けた日本人の宿命的な知的葛藤をクローズアップさせた先駆者」と持ち上げた上で、「(横光は：筆者注)その犠牲者でもあった」と彼に寄り添った形で擁護している。同様の形容をしているのは菅野昭正で、彼は横光を「一種の殉教者みたいな存在だった<sup>(120)</sup>」と同情の念を表明している。

また、モンパルナスの墓地を見下ろす横光と同じホテルに宿泊した今日出海も、このような横光を西洋という巨大な風車を敵の怪物と信じて突進し、命を落とした騎士のようだと述べている(「私の人物案内」)。このよう

に、西洋文明に果敢に挑んだ横光は、『旅愁』に対する辛辣な批判とは別に、「犠牲者」「殉教者」、そして「悲劇の騎士」といった讃美にも似た表現で評価されているのである。

東西文明論を東西同等の立場で展開して行こうとした横光にとって、太平洋戦争における日本の敗北は衝撃的だったに違いない。つまり、現実論よりも強しであって、どれほど日本主義を標榜しても、詮無せんないことだったのである。

そのような忌むべき状況が彼の心身を蝕んだのか、終戦から一年が経過した一九四六(昭和二一)年六月、横光は高血圧による脳溢血発作を起こす。幸い症状は軽微で、身体からだの痺れもまもなく消失する。しかし、横光は夏目漱石や芥川龍之介と同じ胃潰瘍という宿痼しゆくゑを抱えており、結局はそれが命取りになる。ヨーロッパ滞在中は胃痛も収まっており、「西欧におけるパン食とビールが良かった」と自己分析していたが、彼の場合は芥川の神経症起因と違って、創作に関わるストレス由来と言われている。そうだとすれば、欧州旅行中は締め切りに追われることがなかったのが良かったのかもしれない。

そして横光は一九四七年(昭和二二)年六月、その胃潰瘍が悪化して吐血する。しばらくの間、養生に専念するが、半年後の一二月三〇日午後四時過ぎ、遂に腹膜炎を併発し、自宅で四十九歳九ヵ月の生涯を閉じることになる。文壇にとって、まさに断腸の早逝という他ない。

葬儀は翌一九四八(昭和二三)年一月三日、東京北沢の自宅で催され、ともに一世を風靡ふうびした盟友の川端康成が次のような弔辞を読んでいる。「このたびの戦争が、殊に敗亡が、いかに君の心身を痛め傷つけたか。僕等は無言のうちに新あらたな同情を通わせ合い、再び行路を見まもり合っていたが、君は東方の象徴の星のように卒にわかに光焰を發して落ちた」「君は(中略)生涯土の落ちぬ璞あらたまであった」。まことに正鵠を射た弔辞である。このように、横光の死は太平洋戦争という時代の流れに翻弄され、代表作『旅愁』を完成に導くことが出来ないまま散った壮絶な「戦死」だったと言えるかもしれ

れない。

## おわりに

文明と自然の関係という点において、西洋と日本の間では決定的な相違がある。つまり、日本ではあらゆるものが自然との調和や共存を模索する傾向にあるのに対し、人為による合理主義と科学主義によって「近代化」を成し遂げた西洋は、自然を支配することに眼目を置いている。つまり、そこでは人間は崇高な理性的主体であり、それ故に近代文明によって自然を客体化しようとする。そのような形で人間の自然支配が進行すること、それが彼らにとっては「進歩」を意味するのである。

日本は明治の文明開化を契機に、西欧諸国から最先端の科学、経済、軍事技術を導入して「近代国家」に生まれ変わり、時を置かずして欧米列強と肩を並べる存在に申し上がった。しかし、昭和の時代に入ると、その自負や自身過剰、さらに慢心が仇<sup>あだ</sup>となって、次第に国際調和よりも愛国心に醸成された国家主義や軍事大国主義が台頭し始める。そのような社会潮流と呼応するかのようになり、西洋文明に対する反発、さらに日本古来の伝統や精神文化が俄<sup>にわか</sup>にクローズアップされるようになる。その行き着く先が戦争だったのであるが、まさにそのような風雲急を告げる時期に、横光は「西洋」対「日本」という大命題を背負って「敵陣」に乗り込んだのである。

そのような時代背景を斟酌すると、先達である鷗外や漱石、荷風たちの西欧渡航と横光のそれは根本的に異なると言わざるを得ない。つまり、鷗外たちの渡航目的は、当時の最先端文明を持ち帰るという遣唐使の使命を担っていたのに対し、横光はその西洋文明を醒めた眼差しで眺め、日本との比較において批判するという姿勢だったのである。

つまり、前者には無批判的受容の傾向が顕著だったわけで、その姿勢は「ああ！わがフランスよ！自分はおん身を見んがためにのみ、この世に生れて来た如く感ずる(中略)フランスよ、永世<sup>とこしえ</sup>に健在なれ！」<sup>(121)</sup>という荷風の高らかなフランス礼讃に象徴されている。ところが、横光たち昭和の知識

人たちは生来、その西洋文明を存分に吸収し血肉としていたわけで、それは決して物珍しいものではなかった。それよりも、体内に取り込まれたその“異分子”に違和の念を抱き、その再検証の必要に迫られたのである。

そのような命題を小説にした『旅愁』は結局、明確な「答」に辿り着くこと叶わず、途中挫折の憂き目に遭って未完に終わってしまった。その意味では、文壇から「失敗作」いう烙印を押されても致し方がないのかもしれない。

ところがそれにも拘わらず、戦後七十有余年を経た今日において、この『旅愁』は相変わらず熱心に読み継がれているのである。これは一体、如何なることなのか。作品に対する評価とは別の論理で愛読されているわけだが、それは国際社会が一層グローバル化したことと無縁ではないように思える。つまり、日本が近代ヨーロッパの洗礼を受けて以来、西欧と切っても切り離せない知的運命共同体になったにも拘わらず、日本人と欧米人の中でコミュニケーションを阻害する「壁」が相変わらず厳然と屹立しているのである。

今日においても東西文明は相変わらず屹立し合っているわけで、その意味において横光が浮き彫りにした両文明の葛藤や軋轢、そしてそれに喚起された人々の懊悩は消滅することなく、宿命的な永遠のテーマとして生き続けている。現実問題として、人類の共存共栄という壮大な理念実現のために誕生した欧州連合(EU)においてすら、最近では民族や宗教の相違ゆえ、異なるものを排斥する偏狭なナショナリズムが台頭している。このことに鑑みても、この種の問題の根は想像を絶するほど深甚で、横光が『旅愁』において提起した大命題は依然として未解決のまま漂流し続けているのである。

#### 引用・参考文献

- (1) 『旅愁 上』、横光利一著、講談社文芸文庫、1998、104頁。
- (2) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」、横光利一、講談社文芸文庫、2006、8頁。
- (3) 同 27頁。

『旅愁』『欧洲紀行』における横光利一の東西文明論とその破綻

- (4) 『旅愁 上』, 横光利一著, 講談社文芸文庫, 1998, 16頁。
- (5) 同 17頁。
- (6) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 56頁。
- (7) 『旅愁 上』, 横光利一著, 講談社文芸文庫, 1998, 31頁。
- (8) 同 31~32頁。
- (9) 同 41~42頁。
- (10) 同 42頁。
- (11) 同 45頁。
- (12) 同 46頁。
- (13) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 57頁。
- (14) 同 57~58頁。
- (15) 同 80頁。
- (16) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」「巴里から帰って」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 206頁。
- (17) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 58頁。
- (18) 同 109頁。
- (19) 「国文学 横光利一 第35卷13号」「横光利一のドイツ体験——パリからベルリンへ」, 栗坪良樹, 學燈社, 1990, 55頁。
- (20) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 74頁。
- (21) 『旅愁 上』, 横光利一著, 講談社文芸文庫, 1998, 57頁。
- (22) 同 56頁。
- (23) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 73~74頁。
- (24) 同 107頁。
- (25) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」「巴里から帰って」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 210頁。
- (26) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 75頁。
- (27) 同 74~75頁。
- (28) 同 76頁。
- (29) 同 81頁。
- (30) 同 81~82頁。
- (31) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」「手紙1」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 60頁。
- (32) 『旅愁 上』, 横光利一著, 講談社文芸文庫, 1998, 99頁。
- (33) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」「巴里から帰って」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 207頁。
- (34) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 76~77頁。
- (35) 同 77頁。

- (36) 同 116頁。
- (37) 同 90頁。
- (38) 同 88頁。
- (39) 同 90～91頁。
- (40) 同 83頁。
- (41) 同 89頁。
- (42) 同 91頁。
- (43) 『旅愁 上』, 横光利一著, 講談社文芸文庫, 1998, 122～123頁。
- (44) 同 124頁。
- (45) 同 227頁。
- (46) 同 493頁。
- (47) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 84頁。
- (48) 同 87頁。
- (49) 同 94頁。
- (50) 同 92～93頁。
- (51) 同 100頁。
- (52) 同 101頁。
- (53) 同 103頁。
- (54) 同 104頁。
- (55) 『留学』「第三章 爾<sup>なんじ</sup>も, また」遠藤周作, 新潮文庫, 1968, 134頁。
- (56) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 114頁。
- (57) 同 152頁。
- (58) 同 153頁。
- (59) 同 119～120頁。
- (60) 同 121頁。
- (61) 同 120頁。
- (62) 『旅愁 上』, 横光利一著, 講談社文芸文庫, 1998, 169頁。
- (63) 同 171頁。
- (64) 同 171～172頁。
- (65) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 124頁。
- (66) 同 126頁。
- (67) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」「ハンガリア行」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 63頁。
- (68) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 127頁。
- (69) 同 134頁。
- (70) 同 133頁。
- (71) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」「イタリア行 2」, 横光利一, 講談社文芸文庫,



『旅愁』『欧洲紀行』における横光利一の東西文明論とその破綻

- 2006, 69頁。
- (72) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」「スイス行」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 70頁。
- (73) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 139頁。
- (74) 同 140頁。
- (75) 同 141頁。
- (76) 同 155頁。
- (77) 同 156頁。
- (78) 同 158頁。
- (79) 同 158～159頁。
- (80) 同 159頁。
- (81) 同 161頁。
- (82) 同 166頁。
- (83) 『旅愁 下』, 横光利一著, 講談社文芸文庫, 1998, 24頁。
- (84) 同 25頁。
- (85) 同 31頁。
- (86) 同 32頁。
- (87) 同 33頁。
- (88) 『機械・春は馬車に乗って』「厨房日記」, 横光利一, 新潮文庫, 1969, 192頁。
- (89) 同 204～205頁。
- (90) 『欧洲紀行』「欧洲紀行」「巴里から帰って」, 横光利一, 講談社文芸文庫, 2006, 208頁。
- (91) 『旅愁 上』, 横光利一著, 講談社文芸文庫, 1998, 10頁。
- (92) 『東と西 横光利一の旅愁』「庄内鶴岡行」, 関川夏央著, 講談社, 2012, 200～201頁。
- (93) 『旅愁 上』, 横光利一著, 講談社文芸文庫, 1998, 64頁。
- (94) 同 233～234頁。
- (95) 同 68頁。
- (96) 同 69頁。
- (97) 同 386頁。
- (98) 同 387頁。
- (99) 同 91頁。
- (100) 同 92頁。
- (101) 同 92～93頁。
- (102) 同 177頁。
- (103) 同 340頁。

- (104) 同 223頁。
- (105) 同 262～263頁。
- (106) 同 107頁。
- (107) 同 98頁。
- (108) 同 442頁。
- (109) 「国文学 横光利一 第35卷13号」「『旅愁』 — 漂う心／漂うテキスト」, 東郷克美, 學燈社, 1990, 111頁。
- (110) 『旅愁 下』, 横光利一著, 講談社文芸文庫, 1998, 177頁。
- (111) 同 181頁。
- (112) 同 101～102頁。
- (113) 同 183頁。
- (114) 「国文学 横光利一 第35卷13号」「『旅愁』 — 漂う心／漂うテキスト」, 東郷克美, 學燈社, 1990, 113頁。
- (115) 『旅愁 下』, 横光利一著, 講談社文芸文庫, 1998, 522頁。
- (116) 同 526頁。
- (117) 『欧洲紀行』「解説 現代史轉換の証言者」, 大久保喬樹, 講談社文芸文庫, 2006, 277頁。
- (118) 『旅愁 上』「資料『旅愁』解説」, 河上徹太郎, 講談社文芸文庫, 1998, 524頁。
- (119) 同 533頁。
- (120) 「国文学 横光利一 第35卷13号」「対談 横光利一往還」, 菅野昭正, 學燈社, 1990, 28頁。
- (121) 『ふらんす物語』, 永井荷風, 岩波文庫, 1952, 304頁。